

SETAGAYA LITERARY MUSEUM 2022

世田谷文学賞

受賞作品集



36

世田谷文学賞 受賞作品集

SETAGAYA LITERARY MUSEUM 2022

世田谷文学館

36



SETAGAYA LITERARY MUSEUM 2022

世田谷文学賞

受賞作品集



36

目次

巻頭のことば 亀山郁夫	4	秀作 今村耕一 山館麻美	19
令和3年度第36回世田谷文学賞		佳作	20
選考委員紹介	7	桑原謙一 檀上りく 木下知代子	
短歌部門		岡田優季 道端栞理 野上卓	
俳句部門		丹羽功 阿部章子 平野英輔	
川柳部門		二井依里奈	
詩部門			
エッセイ部門			
入賞者 各部門一席 受賞のことば	10		
応募状況	12		
短歌部門			
選考委員総評	13		
一席 田村敦子	14		
二席 長谷川瞳	15		
三席 永嶋辰子	16		
石本一美	17		
川柳部門			
選考委員総評	29		
一席 本多フミ子	30		
二席 斉田裕子	31		
三席 森沙恵子	32		
伊藤光世	33		
秀作 長谷川康子 竹本宏平	34		
佳作	35		
森田美子 田中智弘 出馬希美代	36		
船木澄子 泉信二 岩崎能楽	37		
市原雅子 服部迪夫 大室恵美子			
今井愛舞			
特別賞			
柏崎澄子 田村智 市原雅子			
岩野秀夫 海道勝代 井口恵			
詩部門			
選考委員総評	39		
一席 土屋春美「季節が溶け始めたとき」	40		
二席 東和郎「さようならの時間」	41		
三席 田村智「最後の蟬」	44		
辻本純美子「夏の終わり、秋の始まり」	48		
50			
俳句部門			
選考委員総評	21		
一席 椎名迪子	22		
二席 長谷川瞳	23		
三席 影山十二香	24		
中川純一	25		
秀作 富山光義 松本昂幸	26		
佳作	27		
山口美恵 花田浩子 吉野新一	28		
寺本明子 押田善五郎 百瀬俊夫			
尾崎雅子 小串節子 二井依里奈			
吉川大紀			
エッセイ部門			
選考委員総評	67		
一席 尾張恵子「父の遺言」	68		
二席 中村福子「歌に思いを巡らせて」	69		
三席 松本昂幸	78		
「中村裕」ある俳人の想い出	87		
金子トシ子「空になる」	97		
秀作 大川薫「太陽の冠」	53		
佳作 松本昂幸「曙光にむかって」	54		
石川厚志「ヒト山」	55		
長谷川誠「都会の森の白いフクロウ」	56		
弟子丸博道	57		
「生まれたときから死がはじまる」	59		
窪田貴子「風に吹かれて」	60		
佐伯研「こんなにしょっぱい」	62		
中村福子「散歩道」	63		
菅井良翔「大切なこと」	63		
泉真帆「呼吸」	64		
イイジマジンキチ「十三人殺した記録」	65		
西川由希子「夏休みの記憶」	66		

巻頭のことば

世田谷文学館館長 亀山 郁夫

大震災とパンデミックという二つの災厄のもとで、文学は大きく変貌しつつある。生と死、記憶、運命などの重い主題が地鳴りのように不吉な音に響かせているのだ。他方、ネット時代の情報過多にあらがひ、言葉のオーセンシティブティ（真正性）を求める声も高まっている。「Z世代」と呼ばれる若い人々に広がりつつある現代短歌ブームがその一つ。毎週木曜日の人気番組「プレバト!!」の影響などもあるのだろうか。では、オーセンシティブティとは何か。小説のジャンルならば、自在に「うそ」の翼を広げることも可能だろうが、詩のジャンルはそうはいかない。なぜなら、詩は、「ほんとう」のきわみとでもいいうべき凝縮された小宇宙なのだから。読者はつねに詩の「虚構」が、たんなる「うそ」か、真正なものかを秤にかけてながらテキストと対峙している。

谷川俊太郎が思い出される。

「うそでしかいえないほんとのことがある」（『うそ』）

俯瞰してこれらの流れは、文学における小形式ないし極小時代への移り行きを暗示して

いるかのようでもある。ツイッター一四〇文字とくらべ規模はかなり小ぶりながら、短歌三十一文字は、はるかに広く世界を見晴らす窓の役割を果たしている。極小形式の難点といえば、ひとつに翻訳の困難さが挙げられるが、それは、あくまでも想像力の問題だろう。静かに目と耳を傾けるゆとりさえあれば、翻訳テキストの向こうにも、詩の女神はすっと舞い降りてくる。

ものほためし、芭蕉の句の翻訳を引用してみよう。

Old Pond——frogs jumped in——sound of water.

ラフカディオ・ハーンの訳である。これが、最新の自動翻訳機械にかけるとどうなるか。

Old pond, frog jumping in, the sound of water.

AIが少なくともハーンの生きた明治時代には追いついていないことが明らかである。しかしそこから現代までは一足飛び。

そこで、皆さんにお勧めしよう。エッセイでも、詩でも、短歌でも、俳句でも、川柳でもいい。最新にして最高の使い勝手とされる DeepL に翻訳を依頼し（ネットで無料でアクセスできる）、世界の読者の前に自作を差し出してみせるのだ。この、「異化」の、言いようのない心地よさ――。

ここに、二〇二一年度の世田谷文学賞受賞作が勢ぞろいした。いずれの作品も甲乙つけがたい力作である。せっかくの機会なので、短歌部門の優秀作の翻訳を、DeepL にお願

てみた。

「多摩川の丘より望む富士山は親指の爪の半月くらい」（田村敦子）

Fuji, seen from the hill of Tama River, is about half a moon of a thumbnail.

アイアンバス（強弱形）を基本骨格とした、みごとな「散文詩」の誕生である。

令和3年度
第36回
世田谷文学賞
選考委員紹介

【短歌】

草田 照子
くさだ てるこ



- かつて松原・北沢に居住、北沢に本籍あり／昭和19年生まれ
- 現代歌人協会会員、「かりん」選者
- 朝日カルチャーセンター新宿・横浜、NHK文化センター青山教室各講師
- 著）歌集『天の魚』『父の贈り物』『聖なる時間』『旅のかばん』、歌書『うたの信濃』など

【短歌】

佐佐木 幸綱
ささき ゆきつな



- 玉川町在住／昭和13年生まれ
- 早稲田大学名誉教授、日本芸術院会員
- 「心の花」主宰、「朝日歌壇」選者
- 追空賞、詩歌文学館賞、若山牧水賞、齋藤茂吉短歌文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞、読売文学賞、紫綬褒章、現代短歌大賞ほか
- 著）歌集『群黎』『春のテオドール』、評論集『万葉集のへわれ』など

【俳句】

高橋悦男



- 世田谷在住／昭和9年生まれ
- 早稲田大学名誉教授（英米文学専攻）
- 日本文藝家協会会員、俳人協会評議員
- 「海」主宰
- (著) 句集『天城』『実朝の海』『海光』『摩訶』『現代俳句の肖像』『俳句月別歳時記』など

【川柳】

おかの蓉子



- 羽根木在住／昭和16年生まれ
- 川柳誌「番傘」本社同人
- 日川協三重大会特選、国民文化祭鳥取大会特選及び入賞、国民文化祭祭愛知大会特選及び入賞

【俳句】

西村和子



- 上野毛在住／昭和23年生まれ
- 知音俳句会代表、俳人協会常務理事、国際俳句交流協会理事、「毎日俳壇」選者
- 第7回俳人協会新人賞、第19回俳人協会評論賞、第46回俳人協会賞、第8回小野市詩歌文学賞ほか
- (著) 句集『夏帽子』『心音』『椅子ひとつ』『我が桜』『虚子の京都』『季語で読む源氏物語』など

【川柳】

速川美竹



- 奥沢在住／昭和3年生まれ
- 立正大学名誉教授（英語・英文学・比較文学専攻）
- 「川柳レモンの会」「九品仏川柳会」主宰、元・朝日カルチャーセンター並びにNHK文化センター講師（川柳・英米文学）、日本ペンクラブ名誉会員
- (著) 『小泉八雲の世界』、『速川美竹の英訳川柳・開けこま』（共著）『国際化した日本の短詩』など

【詩】

三田洋



- 砧在住／昭和9年生まれ
- 日本現代詩人会・日本詩人クラブ元理事・日本文藝家協会各会員、評論家としても活躍。国民文化祭現代詩選者、現代詩人賞、詩人クラブ「詩界賞」選考委員長など歴任
- 第4回壺井繁治賞
- (著) 詩集『回漕船』『グールドの朝』『悲の舞』『新・日本現代詩文庫三田洋詩集』、『詩論・エッセー文庫12 抒情の世紀』『ボエジーその至福の舞』『非サイエンス詩学のすすめ』など

【エッセイ】

鴻巣友季子



- 区内在住／昭和38年生まれ
- 毎日新聞書評委員、日本テレビ・CS日本番組審議委員、日本ペンクラブ会員、朝日新聞文芸時評担当（2021年4月より）
- 第5回BABEL国際翻訳大賞新人賞
- (訳) クッツェー「恥辱」、ポー「E・A・ポー」、ブロンテ「嵐が丘」、ミッチェル『風と共に去りぬ』、ウルフ『灯台へ』、(著) 『謎とき「風と共に去りぬ」』『孕むことば』『熟成する物語たち』『翻訳ってなんだろう？』『小説版「ロミオとジュリエット」(シエイクスピア原作)』など

【詩】

渡辺めぐみ



- 等々力在住／昭和40年生まれ
- 日本文藝家協会、日本現代詩人会会員、第63回日氏賞、第24回及び第28回日本詩人クラブ新人賞各選考委員、第30回国民文化祭・かこしま2015の詩の賞の最終審査員
- 第11回「詩と思想」新人賞、萩原朔太郎生誕120年記念・前橋文学館賞、第21回日本詩人クラブ新人賞、第11回日本詩歌句大賞
- (著) 詩集『ベイ・アン』『光の果て』『内在地』『ルオーのキリストの涙まじり』『星の岸』

【エッセイ】

堀江敏幸



- 区内在住／昭和39年生まれ
- 早稲田大学文学学術院教授・早稲田大学短歌会会長
- 平成11年三島由紀夫賞、平成13年芥川賞、平成15年川端康成文学賞、平成16年谷崎潤一郎賞、平成18年読売文学賞小説部門、平成28年野間文芸賞
- (著) 『おぼらばん』『熊の敷石』『雪沼とその周辺』『河岸忘日抄』『坂を見あげて』『その姿の消し方』など

令和3年度

第36回

世田谷文学賞
入賞者

短歌部門

〔一席〕 田村敦子

【受賞のことば】

コロナ禍となり近隣をよく歩くようになったおかげで新しい発見が増えました。特に国分寺崖線沿いが好きなコースです。この度は望外の賞を頂き、驚きながらも今後の大きな励みとなりました。ありがとうございます。ありがとうございました。応援してくれる皆様、特に母に感謝いたします。

〔二席〕 長谷川瞳

〔三席〕 永嶋辰子

〔秀作〕 今村耕一

〔佳作〕 桑原謙一

木下知代子

道端栞理

丹羽功

平野英輔

石本一美

山館麻美

檀上りく

岡田優李

野上卓

阿部章子

二井依里奈

俳句部門

〔一席〕 椎名迪子

【受賞のことば】

本当にも思いもかけない御褒美をいただき暫くぼんやりしてしまいました。高齢になりました、楽しみごととも少なくなった私にとって俳句は生涯の友。思い出の糸をたぐりながら、これからも美しい句とのつきあいを続けていけたらと思います。今度の受賞を励みにして。

〔二席〕 長谷川瞳

〔三席〕 影山十二香

〔秀作〕 富山光義

〔佳作〕 山口美恵

吉野新一

押田善五郎

尾崎雅子

二井依里奈

中川純一

松本昂幸

花田浩子

寺本明子

百瀬俊夫

小串節子

吉川大紀

川柳部門

〔一席〕 本多フミ子

【受賞のことば】

「川柳一席」俄かには信じがたい結果が届き嬉しさよりも驚きが先でした。駒沢川柳サロンの紀楽先生、お仲間に出会えた事に感謝!! この受賞を励みにまだまだ頑張りたいと思っております。ありがとうございます。ありがとうございました。

〔二席〕 斉田裕子

〔三席〕 森沙恵子

〔秀作〕 長谷川康子

〔佳作〕 森田美子

出馬希美代

泉信二

市原雅子

大室恵美子

〔特別賞〕 柏崎澄子

市原雅子

海道勝代

〔二席〕 東和郎

〔三席〕 田村智

〔秀作〕 大川薫

〔佳作〕 石川厚志

弟子丸博道

佐伯研

菅井良翔

イイジマジンキチ

西川由希子

辻本純美子

松本昂幸

長谷川誠

窪田貴子

中村福子

泉真帆

松本昂幸

金子トシ子

金子トシ子

詩部門

〔一席〕 土屋春美

【受賞のことば】

今回は、私の書いた詩を一席に選んでいただき喜びで一杯の気持ちです。今思うと、コロナ禍で傷ついてしまった全ての人が、少しでも希望の光を見いだせたらいいなという思いがこの詩を書く時にあった気がします。

エッセイ部門

〔一席〕 尾張恵子

【受賞のことば】

書くことで、今はもうここにいない人たちとともに在ることができました。母と二匹の猫を続けて見送った年の終わりに受賞の知らせが届いたことは、しみじみうれしいことです。関わられたみなさまに感謝いたします。

〔二席〕 中村福子

〔三席〕 松本昂幸

金子トシ子

※エッセイ部門は応募作品を事前選考により十篇に絞り、本選考にて一席から三席までの入賞者を決定しています。

短歌

【 令和3年度 第36回 世田谷文学賞 応募状況 】

部門	応募作品数 (応募者数)	年齢層		
		平均年齢	最高齢	最年少
短歌	143 (49人)	67.1歳	93歳	15歳
俳句	222 (74人)	67.4歳	94歳	14歳
川柳	307 (103人)	72.7歳	97歳	29歳
詩	44 (44人)	56.6歳	86歳	19歳
エッセイ	54 (54人)	55.3歳	94歳	22歳
合計	770 (324人)	65.6歳	97歳	14歳

総評

草田照子

今年も去年から続くコロナ禍と、一年延期されたオリンピック・パリンピックがあり、作品も多かれ少なかれ影響を受けていたようです。応募された数自体はそう多くはありませんでしたが、広い年齢層の方々の、それぞれの生活の場を大切にしたいよ作品が多くて、楽しく読ませてくださいました。選ぶのにもさまざまに迷う場面も多く、うれしいことでした。次回もまた、たくさんの方よりよい作品に出会えますように。十代、二十代の方もお待ちしております。

佐佐木幸綱

今年、三席になった永嶋辰子さんの年齢が、なんと九十三歳とありました。そこで思い出すのは、古典の時代から歌人には長寿の人があんがい多かったことです。作歌で大切なことは、思いをできるだけ遠くへやることです。思いを自分の周辺にとどめず、思い切つて解き放ち、できるだけ遠くへ飛ばたかせることです。

こうした精神生活が長寿になかうのか、古典の時代から長生きの歌人が多くいたようです。藤原俊成九十二歳をはじめ、八十歳以上生きた歌人は多くいます。女性では生年の分からない人が多いのですが、それでも、俊成女は八十四歳ぐらまで生きてたらしいと推定されています。思いを遠くやる短歌を作つて、元気で長生きをしましょう。

短歌部門「二席」 田村敦子

端っこに住んでおります四路線

乗り継ぎてゆく世田谷区役所

南風つよければ聞こゆキューイキューイン

多摩川駅のレールの軋み

多摩川の丘より望む富士山は

親指の爪の半月くらい

草田照子

世田谷区が多摩川に近いどこかの町。いかにも時間のかかりそうな区役所への行き方や、風の日聞こえる電車の軋み、丘から遠く見る富士山など、作者の日常の風景が身体的な聴覚や視覚を通して詠まれ、実感のある三首でした。

佐佐木幸綱

世田谷区の住民であることであえて前面に押し出した二首目をはじめ、東横線の「多摩川駅」をうたう二首目、そして多摩川の堤防（だらう）から見る富士山をうたう三首目、三首すべてが世田谷にこだわった構成に感心しました。周知な技術のおかげで、北海道や沖縄の読者にも、世田谷の現在が読んでもらえるだろう、そう思いました。

家のドア踏み出せばまた日常も

小さき旅なりコロナ禍の街

どの傘も孤独を託ちコロナ禍に

冬の巷の灯火が滲む

三角に丸に細める目もありて

マスクの眼まなこものを言ひたり

深夜放送の世界の子守歌覚めて聞き

戦禍のなかの子ら思いおり

東京のオリンピックを目標に

老後生きしか老を恐れず

孫を頼り始めしスマホの身につきて

オンラインに結ぶ絆尊し

草田照子

コロナ感染者が増えるなかで長く外出しないしていると、同じことをしても、見ても何かいつもと違う感じがするものです。家から一步出ることの新鮮さや、雨の中を行く傘の孤独感など、違和感をうまく捉えています。

佐佐木幸綱

三首ともコロナにかかわる作でまとめた一連です。三首全体をつつむさびしい空気が、生きることの孤独をにじませる一首目と二首目に注目しました。とくに、雨の町を遠景でとらえた二首目は、音を消し、きらめきを消したその消し方が独特で、印象深く読ませてもらいました。

草田照子

今回応募されたうちで一番ご高齢の方です。東京オリンピック決定は二〇二三年のこと。当時、二〇二〇年までは生きたいと願う歌がよく詠まれました。結句の「老を恐れず」に、この八年間の老いの重さを想像し、胸を打たれました。

佐佐木幸綱

作者の年齢をみて驚きました。なんと九十三歳。近年、元気で長生きの方が多くなったとはいえ、しっかりしたうたいぶりを見て、「おっ」と思いました。土屋文明百歳、五島茂百三歳など、歌人には長生きした人も多く、ぜひ元気でうたいつけていただきたいと思いません。好奇心を広く世界に広げた一首目が、やはりいいですね。

S F いやお面かぶりを思いつつ

フェースシールドに今手をのばす

この世をばフェースシールドつけ見るに

澄んではおらず充分明るい

坂をおり信号付きの踏切を

渡りて実家へ今日も急がず

赤黄の長靴揺らす吊り橋が

砧公園旅の入り口

ひたすらに砧の丘を駆けていく

ランドセルから制服になり

今日はもうおいしいケーキを買いました

泣きたいけれど負けないように

わがままでやくにたたないうちのねこ

なでなでしたりもふもふしたり

草田照子

よかったのは「フェースシールド」に世田谷区の浄真寺のまつり「お面かぶり」を思い出したところでしょう。世の風景は「充分明るい」にもかかわらず、澄んでいないのはコロナ禍のせいばかりではないかもしれません。

佐佐木幸綱

新型コロナがはやって、それまで見たことがなかった「フェースシールド」という不思議なものを、不思議なものだなあ、という率直な好奇心を前面に出してうたった二首目、二首目がいい、と読みました。「S F いやお面かぶり……」と、とまどった気分をそのまま言葉化してみせた面白さに、とくに感心しました。

感染者出てないけれど村祭り今年も中止と決めた夏ゆく

桑原謙一

聖堂の光のごとく鳥のこえ降りそそぐ町に移り住みたり

檀上りく

小さな手わっと広げて音つかむみてみて先生ここまでとどくよ

木下知代子

あめの中バラバラになったバッタ見たいつかわたしも自然に還る

岡田優季

車の音は波のよう夜の中まぶたを閉じて海にただよう

道端栞理

み吉野に春の雪降り声もなく狼像の冴え冴えと立つ

野上卓

家の中へ五條川から水をひき水車まわして精米をせし

丹羽功

薄藍に霞む斑尾を遠景に田はひっそりと田打ち待ちをり

阿部章子

来て六ヶ月「平野先生」言えなくて「やさしいせんせい」はにかみながら

平野英輔

オリオンのリボンをつけていいですか私をかざるものは他なく

二井依里奈

俳句

総評

西村和子

疫病の世界的流行という非常時の二年間だったが、その間も季節の移りゆきは滞ることなく、句材は日ごと、週ごとに、月ごとに変化し続けた。こんな時こそ、今まで外へ向けられていた興味を、日常の足元に、心の内へ向けた作者が多かったと思う。自然の懐の中で生かされている人間存在を、これほど意識した時期もなかった。知っているはずの我が町を、我が家を、日々の暮らしを、句材を求めて見直してみると、新しい発見があるはずだ。東京の端で、俳句という片隅の文学に、生きる証を刻みつけた人々の作品は貴重だ。疫病の嵐が地球を襲った日々も、句ごころを忘れずに暮らした一人一人の本音が託されているからだ。

俳句部門 二 席 椎名迪子

青葡萄太る廃墟の静けさに

あけたての渋き格子戸秋暑し

地唄舞見に秋色の神楽坂

西村和子

一句目、葡萄は林檎や無花果と共に世界最古の果物のひとつだ。夏の状態を「青葡萄」と呼ぶ。廃墟の静寂の中で育つてゆく自然の力と、人工物のはかなさとの対比に心惹かれた。

二句目の「渋き」という語には、声や音がなめらかでない意味もある。この一語の用い方がポイントの句。秋が来たのにまだ暑い日常のやりきれなさを、具体性をもって表わしている。

俳句部門「三 席」 長谷川瞳

信号は押ぼたん式蝶渡る

あれそれにくっきりもあり木の葉髪

何食はぬ顔の二つ目草の餅

西村和子

二句目、「木の葉髪」が身心の衰えを象徴している。人の名や物の名が咄嗟に出て来ず、つい「あれこれ」で済ませることが多くなった。おまけにくっきりミスも増えた。そんな自分を客観的につき離して詠んでいる。

三句目は、そしらぬ顔をしながら、草餅を二つも平らげる人を、「何食はぬ」という言葉の面白味に掛けて興じて表現した余裕を感じ取れる。

俳句部門「三 席」 影山十二香

裏山の風に吹かれて懸り藤

割烹着真っ白正月奉仕団

白梅に透けておっとり薄紅梅

西村和子

二句目、割烹着の白さだけでは常識の域を出ないが、正月の奉仕団の様子であることがわかると、改めて上五から読み直したくなる。皆新品を身につけて、皇居か神宮の清掃に取り組んでいるのだろう。「ポフンティア」ではなく「奉仕」という日本語が精神性を帯びている。

三句目は、白梅紅梅のそれぞれの花びらの薄さ、日当たり具合までもが見えてくる。「おっとり」の一語は最高の讃辞。

俳句部門「三 席」 中川純一

秋風や絵筆とめては遠目して

目の前を舞ひ秋蝶の三つ巴

翳雲押し縮めつつ茜差す

西村和子

一句目、屋外でカンバスに向かっているのだろう。遠目して遠景を眺めるだけでなく、秋風を見ているのかも知れない。そんな奥行きが句にも生じた。三句目は翳雲の動きを描いたものだが、「押し縮めつつ」の描写が絶妙。ゆるやかに流れているうちに、間隔が狭まってきたことを手際よく表現している。しかも夕日に照らされて、一片一片が茜色に染まりつつあるのだ。大きな時の流れも感じる句。

俳句部門「秀 作」 富山光義

灯の入るや佞武多一気に動き出し

寒月をゆさぶる秩父囃子かな

俳句部門「秀 作」 松本昂幸

春の河浚漈船の浮かびる

万緑の岸漕ぎ出でし櫂の音

自転車の母は伴走今朝の秋

山口美恵

西瓜切る父の一刀潔し

花田浩子

雀の子一拍おいて飛び立てり

吉野新一

一歳と指で答へて夏帽子

寺本明子

遠泳のやがてひとりの空となり

押田善五郎

手入れせぬ墓また増えし秋彼岸

百瀬俊夫

水浴びの鳥のざわめく四温かな

尾崎雅子

手織機の音聞え来る春障子

小串節子

まっすぐに愛を語って熱帯魚

二井依里奈

マスクして未来信じて明日を待つ

吉川大紀

川柳

総評

おかの蓉子

単なる想像ではあるが、コロナ禍で在宅時間が多いことも理由なのか、応募が倍増。前回の、男性の活躍に比べ、例年どおり、圧倒的に女性上位の今回だった。コロナに関した作品が多かったのは当然とはいえ、作品はバラエティー豊か。選句も楽しかった。タカが川柳、という人もおられるけれど、「こんなに胸を打つ句もあるんだ」と、私の勝手なノスタルジーにキエンとなったりも。疎開から、かなり遅れて東京へ戻った私は、そこでの小学校の出来事を思い出す句に遇い、立派な先生だったなと改めて感じた。

速川美竹

賢治ではないが「コロナ禍にも負けず」今回は格段の出来でした。狂句や単なる報告川柳も無きに等しく、定型もきちんと守られていて「安心。句材もバラエティーに富み、むやみに攻撃的な風刺や、うんざりするような嘆き節も姿を消して、ゆとりとユーモア感覚が横溢していました。やたら難しい漢字や表現を使うこけおとしは見られず、普通の人が日常生活で感じることを、訴えたいこと、発見したことを普段のことばで表現すれば「川柳」になるという好例を示してくれました。自句以外の句もじっくり鑑賞して下さい。

おかの蓉子

①表現の妙と言おうか、軽みの中に美しさも感じられて、この遊びをしたことのある子供時代を思い出していた。下5が何ともピタリ。②コロナの中、オリンピックを無事に終えることが出来たニッポン。「大事がなくて何より」と静かに拍手していた私。そうか、金メダルって耐え抜いた奥歯に上げるのが一番かも。③好みの問題とは言え、この句の作者と、私の舌は同じだなあ、と笑ってしまった。

速川美竹

①誤解がなければ遠い子供時代に見た懐かしい思い出——楽しい夢ある句。②選手が獲得した金メダルの重さを「奥歯」で巧みに描写。むやみに舐めてほしくない。③高級なキャビアとおなじみの明太子のコントラストが川柳の大衆性を動的に突いていて「真さん」的。特に①と③が可笑しみのあるイメージを鑑賞者に抱かせてくれ、定型で詠まれた本格川柳の良さを感じさせてくれて嬉しい。

川柳部門「一席」本多フミ子

下敷に乗って砂鉄はバレリーナ

食い縛り耐えた奥歯に金メダル

キャビアより舌が喜ぶ明太子

川柳部門「二席」 齊田裕子

コロナ禍の不満抑える金メダル

ちゃぶ台を囲んだ昭和いま孤食

留守の家ルンバが一人踊り出す

おかの蓉子

①周りの応援も聞こえる開催国のニッポンには金メダルの数々は、コロナの鬱も飛ばしてしまう特別の感動もあったのでは、と考える。②孤食の児童が問題になっているテレビを見て昔の小学校の給食時間の「コマが浮かんだ。給食の時、やたらに燥ぐ男の子がいた。誰かが注意したら先生の言った「○○君、家ではいつも独りでご飯食べるんだよね。だから、学校の給食は賑やかにしていいんだよ。」の言葉が思い出されて胸が詰まった。③「……ルンバが一人踊り出す」なんてお見事。便利な世の中で助かりますねえ。

速川美竹

①一見コロナ禍のストレスを発散させてくれた五輪の後始末が問題化されているのも皮肉だが素直な出来の時事句。②分かりやすく「今」を「いま」に直した。「あの頃を語る相手はもういない。美竹」年頃になると、貧政の下で淋しい「孤食」生活がしゃしゃり出ることも。人生の裏表（悲喜劇）こそ川柳の句材——しんみりする。③笑い出したくなる軽妙な句。まさか音楽の「ルンバ」と考え違いする川柳愛好家はまい。

川柳部門「三席」 森沙恵子

一針の力信じるしつけ糸

布団干す憂さも嘆きも陽に晒す

ボランティア絆をつなぐ空の青

おかの蓉子

①一針の力を信じる。とても良い言葉でした。私、裁縫が苦手。辞書で調べたら生地の種類によって、しつけ糸も変えるのだそうです。②布団を干すって、そんな効果もあったのね。憂さも嘆きもカラッとさせてくれた太陽に、時にはお礼を、の気持ちでしょうか。素敵な句。③『もう三年近く、海外ボランティアに行っていないなあ』とブツブツ。まだ当分は無理かもと夫。「絆をつなぐ空の青」が秀逸です。

速川美竹

①「しつけ糸」の仕付けが悪いと……お針も人間の養育も同じでしょう。女性の作品と推察される力強い感じの句。②ウイルスも一応下火になって、久しぶりにおでんとう様を再び拝めた快い布団。人間の憂さもそうあってほしいのだが、そうは問屋が卸さない。③人の世の連帯を目指して活動している方の作品か、「空の青」のよう

川柳部門「三 席」 伊藤光世

忘れそうマスクの下の片えくぼ

コロナ禍もセミの声降る九品仏

おかの蓉子

①この句は、マスクをしている本人が「自分の片えくぼを忘れそう」とも受け取れるなあ、と考えた。が、「あの娘のエクボ」だと思いたい。でも作者は女性。勿論OKである。②世田谷の地名が出て来て嬉しかった。本当に降るように、コロナなんて蹴飛ばす勢いで、鳴いてはいたが、例年より気の所為か、やや静かだったような。

速川美竹

①現在もてあまされている「マスク」を句材にした一つの発見。「片えくぼ」で重苦しさが救われる。マスクを透す眼鏡を掛けたら面相が見られるでしょうね。②とかく煩わしいコロナ禍でも、いつものように盛大に短命を訴えているセミの声が都下とは思えぬ静かな境内で負けるものかと降りかかる——当文学賞に格好の作品。もう一句は中八で残念。

(注)朝日新聞の連載小説『また会う日まで』(池澤夏樹)には九品仏のことが頻出。

川柳部門「秀 作」 長谷川康子

雨合羽着た新聞が朝のまま

あれば邪魔なければ淋し本の帯

川柳部門「秀 作」 竹本宏平

撤退に邯鄲^{かんたん}の夢さめたらし

さりげなく阿吽の呼吸たしかめる

武器でなく中村哲が五人欲し

森田美子

迎え火を教えた人を迎える火

田中智弘

沈黙も味わい深く嬉野茶

出馬希美代

接待へ断り上手生き上手

船木澄子

運開く鍵は感謝の言葉かな

泉信二

人生はまだまだウフフ喜寿傘寿

岩崎能楽

コロナ禍へどこにも行かずふて寝する

市原雅子

薬局でお薬手帳よくしゃべる

服部迪夫

医師よりも私の方が元気そう

大室恵美子

たらればを考えているジャンボくじ

今井愛舞

家ごもり妻の地雷をまた踏んだ

柏崎澄子

テレワーク妻もネットもすぐきれる

田村智

コロナ禍へどこにも行かずふて寝する

市原雅子

じろじろと見られる顔にマスクなし

岩野秀夫

夢で逢う時もマスクを付けている

海道勝代

リモートじゃ恋も喧嘩もじれったい

井口恵



詩

総評

三田洋

時代はいまパンデミック禍の異様な状況下にある。ひとは生来、他者に採まれながら如何に生きるべきか、逡巡を繰り返しながら生を重ねていく。その他者との共生のなから優れた文学も生まれてくる。しかし他者との距離を保つというパンデミック禍は文学を衰退させかねない。そんな危惧のなか、選考にあたったが、幸いなことに寄せられた作品にはその影響はあまり見受けられなかった。時代がいかに変容しようともこの地に己の足で立ち、かけがえない生を見つめる、そのような感動と共感を呼ぶ作品が多く安堵した。

渡辺めぐみ

死をめぐる詩が多い中で、「太陽の冠」は書法が斬新で面白く、コロナ禍の続く現況を切り開く活気を感じる異色作だ。文脈を読み取りにくいくらいはあるが、卓抜な詩行が並んでいる。「曙光にむかって」は原生林と呼応し自らの精神を解放してゆく哲学的な詩である。「ヒト山」は安定感のある筆致でコロナ禍の日常を細かく描写しており、温かみがある。社会の権力構造と動物界の権力構造を重ねる視点が貴重である。「都会の森の白いフクロウ」、「十三人殺した記録」に才気を、「生まれたときから死がはじまる」、「呼吸」、「こんなにしょっぱい」、「大切なこと」に着眼点の良さを感じた。

季節が溶け始めたとき

詩部門「一席」土屋春美

思い出の色を拾うために
人気のない冬の公園を歩いてみた
公園にあったのは
雪の白と枯れ木と土の無彩色ばかり
無彩色の世界は
ここを凍らせる

さくさくと
降ったばかりの雪を踏みしめ
思い出の音が
聞こえないかと
耳を澄ます

小鳥の声が聞こえた気がして

見上げると
枯れた木の枝の先に
ナナカマドが一房だけ
実をつけていた
ゆうやけ空を見る瞳のような
色だった

思い出のしずくなのか
目の前を氷の粒が光り
流れていった

何も知らない頃の無垢な思いが
踏みしめる雪の下に
埋もれていないかと 目をこらす

誰かが落とした 悲しみのかけらは
もうとっくのまに
ダイヤモンドダストになって
飛んでいったか

思い出の色をさがし
冬の公園を歩いてみた

誰も知らぬブランコが
ふとゆれて 風が変わった
世界がすこしだけ
色づいた気がした

ブランコには
過ぎた日々の
春や夏や秋の風の色が見えた

白と灰色ばかりの世界に
少しだけ色が付いた
そんな気がした

冬の公園に
思い出の色を見つけ

すこしだけ

ほんのすこしだけ

季節が溶け始めた

三田洋

「何も知らない頃の無垢な思いが」の「一行がこの詩の大黒柱のように冬の公園に突き刺さっている。」「無彩色の世界は／こころを凍らせる」のフレーズが、厳しかった過去を想起させる。さらに「思い出の色を拾う」視覚の世界↓「思い出の声」を探す聴覚の世界↓さらに「季節の色」視覚の世界へ戻っていく、この感覚的な展開も奥行きを深めている。

渡辺 めぐみ

冬枯れの公園で思い出の色や声を求める作者は、無人のブランコが風に揺れることを世界が色づくことと捉え、ブランコに春や夏や秋の風の色を見、思い出の色を見つけたことで季節が溶け始めたと感ずる。その詩的感性が素晴らしい。「何も知らない頃の無垢な思いが／踏みしめる雪の下に／埋もれていないかと 目をこらす」という慎ましく内省的な詩行にも惹かれた。

さようならの時間

詩部門「二席」東和郎

「お父さん」

と言ってあげて

背後から母の声に押される

「……」

井戸の底を覗き込んでいるようだ

郷里の敷地の端に

深い井戸があった

少年の頃その縁に身を乗り出して

石を落としていた

ズボッといったきり

闇に呑み込まれてゆく

父は顎を天井に迫り上げて

荒い息をしている

子どもの頃に見上げていた

喉仏が上下する

もうとっくに止めた煙草のにおいがする

病床の周りには

送るものと送られるものが

せめぎ合っている

父は

戦争では死ななかった

当時戦死者は

箱の中にカラカラと音を立てて

戻ってきたという

いったい

どこで誰とお別れをしたのだろうか

人気コメディアンが亡くなった

あの笑顔が

真っ白な箱に収められている

悲しい…のだ

頭の上の方ではなく

ものを食い眠り息をする日々の

身の丈が直に悲しい

おかしいことは悲しいことなんだ

悲しいことはおかしいことなんだ

「もういいいよね」

「もういいいでしょ」

兄や姉たち

さようならの時間

「えっ」

井戸は

どんどん深くなる

三田洋

危篤状態の父をおくる肉親たちとのせめぎあいの「時」の奥行きが深い。父を覗き込みながら少年の頃、家の井戸を覗く自分と重ね、異次元・闇・恐怖をさらに醸し出す手法が効いている。さらに戦死者の遺骨の「箱」やコメディアンの白い箱など死を重層化し、また死を悲しみながらも「ものを食い眠る」自己に引き付ける手法も効果的だ。

渡辺めぐみ

父の臨終の緊迫感をリアルに再現した詩だ。「井戸の底を覗き込んでいたようだ」という看取りの実感から、郷里の井戸に少年の頃落とした石が闇に呑みこまれていった記憶へと遡る記述に、死の恐怖と生と死の隔絶感が漂う。荒い息をする父からやめたはずの煙草のにおいを嗅ぎ取る詩行も巧みだが、コメディアンの死を回想し感慨を述べる転調部分への移行に展開力の不足を感じた。

最後の蟬

詩部門「三 席」 田村智

最後の蟬が鳴き尽くして、夏は終わった。
それにしても

落下したアスファルトは固すぎた

羽をばたばた、いやいやをする

もう声も出せない、空も飛べない

仕方ない、ここでもまんするか

一休みだ

ほんのいっとき、一休みだ

防犯カメラのついた外灯が、白く静かに照らしている

右手にコンビニ弁当を持ったあなたは、左手でヒョイとつまみあげ、
きよろきよろする

樗の木の根元がちょうど良い

軽すぎる亡骸をそっと横たえた

「これで土に帰れる」ふさやかな自己満足

アリが列をなして、せわしなく進んでいる

子供のあなたは、運動靴で踏みつけた

ゴム底の山の部分で踏まれたアリはつぶれ、谷の部分で踏まれたア

リは、何事もなく動いている

もやもやする

生き死にの不思議

生き死にの理不尽

生き残ったアリが幸運なのか

つぶされたアリが幸運なのか

もう働かされることはない

最後の蟬が朽ちて、秋が来て、冬が来て、春が来て、夏が来る
そしてまた

最初の蟬が一生懸命鳴き夏を謳歌し、最後の蟬へとバトンをつなぐ

三田洋

「最初の蟬が一生懸命鳴き夏を謳歌し、最後の蟬へとバトンをつなぐ」。この最後尾の行に作者の感慨がこめられている。所謂「いのちのバトン」である。私たち生命体の使命はここにあるのか、ないのか。決して回答の出ないテーマだ。このことに作者は無常観のようなものを抱くのだろう。「——秋が来て、冬が来て」、この章の冒頭が深々と響いてくる。

渡辺めぐみ

死を間近に控え落下した蟬が、アスファルトの堅さや声も出さず空も飛べない事態を「ここでもまんするか」と語る詩行に、哀感と小さな生き物の命の重さかじむ。だがその蟬の亡骸を土に横たえた子供がアリの隊列を踏みつける。踏まれたか否かでアリの生死が分けられ、自然界の非情な弱肉強食の掟が突きつけられる。蟬の繋ぐ命のバトンを含め命に対する真摯な考察が心に残る。

夏の終わり、秋の始まり

詩部門「三席」 辻本純美子

父が死んだ

父は、死んだ

父は私を上野動物園に連れて行った

神田の古本屋にも連れて行った

運動会には大きなカメラを携えてきた

それから

……

それから

それから、父は疑念の余地なく死んだ

納得のいっていないのは父だけだった

納得のいかない顔をして、父は逝った

それから

それから春が来た夏が来た、

痩せたホッキョクグマに思いを馳せ、

皮ごと食べられるぶどうを食べ、

流行り病に怯え、

扇風機を仕舞って秋を迎えた

そうだ私は扇風機を、納棺するように、

そうっと段ボールに横たえて仕舞ったのだ

そうして

私は娘に告げたのだ

夏は終わりました、と

ちがう、なにも終わってなんかいないのに

私は高らかに宣言したのだ、
なにも分かってなんかいないのに、なにも、
どこに線があるんだ、

どこに夏の終わりを決める線なんかか
あなたの死の、どこに線があったというんだ

父よ

あなたの死とあなたの生とが

ずっと私には何もたらさないのです

あなたが死んでも、あなたの線なんかないように

あなた自身があなたの死に、

納得のいかなかったように

三田洋

夏が終わり秋が始まる。そのように季節には途切る線はない。同じように人の生にも線があつてはいけないのではと作者は訴える。父は自己の死を納得することなく死んだ。納得しないのには生は切れ、死を是認させられる。愛する肉親の死を通じて人間存在の本質を鋭く突く。「ちがう、なにも終わってなんかいないのに」「なにも分かってなんかいないのに」のフレーズが絶唱のように刺さってくる。

渡辺めぐみ

父が納得せずに死に作者も父の死に納得できない思いを、言葉の溢れるままに綴った詩だ。「父が死んだ／父は、死んだ」及び「それから／……／それから」などの詩行から作者の納得できない感情の激しさが伝わってくる。また、「そうだ私は扇風機を、納棺するように、そうつと段ボールに横たえて仕舞ったのだ」という詩行に詩情がある。

太陽の冠

詩部門「秀作」 大川薫

道の傍らで

杯を上げる人がいた。

名前を尋ねると

「時代です。」

と、答えた。

本を売らない本屋に

名前を尋ねると

「時代です。」

と、答えた。

首達が、畑の俵を数えながら

額を寄せて話している。

名前を尋ねると

何も言わずに立ち去った。

炎天下

まるで墓標のように

ぐったりとした旗達が

立ち並ぶ。

しかし、

挑戦という名の風、

尊敬という名の風が

吹き始めると、

命を得たように

大きく強く、はためいた。

生まれたばかりの赤子が泣く。

自分の存在を示すように

天使のラッパのように、

誰かを宥めるように

赤子は泣く。

赤子を抱くと

ずっしりとした生命の重みを感じる。

名前を尋ねると

「2021」

と、答えた。

曙光にむかつて

詩部門「秀作」 松本昂幸

かすかな星屑の光さえとどかない

漆黒の暗闇に きみは迷い込んでいる

そこでは天空と地上のありかさえつかめない

遠い昨日 深い原生林のなかで

きみは見失われた道を求めてさまよい

いつしか洞窟の奥に立ち竦んでいた

いま息をひそめて耳を澄ますと

岩肌から滲みだす地下水が雫となって

滴り落ちては幾重もの闇に反響する

それはきみの鼓動と感応し

自我と外界を隔てる硬質な殻は溶けてゆき

やがてきみは境界を越え 闇と融和する

熱い焦燥ははるかかなたへと遠のき

きみの核心は重力から解き放たれ

宇宙の静謐な息吹を聴く

侵されることのない平和がきみを包み

これまでとは異なる次元の時間がゆったり流れ

もはや恐れるなものもないことを知る

冴えわたる空気を切り裂いて飛びすぎる

鳥の鳴き声にふと目をやると

闇の出口から淡い藍色の気配が忍び込む

流れる爽やかな冷気をまえにたたずめば

原生林を縫って 山頂へと辿る小径が

薄闇の底にぼんやりと姿をあらわす

あるいはそれが昨夜

きみを深い闇に迷わせたものだとしても

今日はまた新しい顔つきで促す

まばゆい朝の子感に誘われ

きみはまたひとり歩きはじめる

稜線の空を染める曙光にむかつて

ヒト山

詩部門「佳作」 石川厚志

疫病の流行るころ、ヒトビトは様々な行楽を慎んでいる。それでも家の中にばかりいるコドモを連れ、気晴らしに少しは近くの山へでも出かけてみようかと家を出る。冬の冷たい日曜日だが、山の上には臘梅の花も咲いているというし、そこには小さな動物園もあるという。

さびれたロープウェイの乗り場に着くと、マスクで口を閉ざしたヒトビトが、しるしに合わせ、消毒を保ち、まばらに並んでいる。おかれた消毒のポンプを押し、手を揉んでから、ふたたびロープウェイに心細く揺られる。冬の山は、枯れた立ち木の下に残る雪もあり、まだらな姿を晒している。山の上に着くと、なるほど慈愛の花が、小径の脇にちらちらと咲いている。それがもう傾きかけた陽射しに、こがねいろに反射

は、自然の山にはなく、実はヒトの餌づけによるものと聞いたことがある。

辺りは本物の山に囲まれている。本物の山の中に、塀で囲まれた偽物の山がある。そこに行き場を失ったサルたちが、日々生活をしている。冬空の下ワタシは、口を閉ざして、それを呆然と見つめている。時を忘れ佇んでいると、傍らでコドモが「もう行こうよ」と囁く。「もう行こうよ」とは言うが、行き場など、本当はもうどこにもない。園は端まで来てしまい、他に見るものもない。戻るにしても、ヒトビトの戻る場所など、もうどこにもありはしない。ただあてもなく口を閉ざして、そこに立ち尽くすしか術がない。疫病の流行るころ、ヒト山は今日も権力に支配されている。

している。

小径を歩き動物園に着くと、剝がれかかったポスターの貼ってある売り場の小窓から、口を閉ざしたヒトがチケットを渡す。ふたたびポンプを押し中へ入ると、ヤギやウサギなどのふれあい園は、今はふれられないと注意書きがしてある。その先トリ小屋にも、トリの別の疫病が流行っているとの注意書きがしてあり、中に何もいない。シカの何匹かが、黒い泥の上をか細く歩いているのが、遠目に見える。

園の端まで辿り着くと、そこにサル山がある。上から見下ろすと、サル山のコザルたちは、変わらず戯れているが、同じく戯れるためおかれはたはずの、鉄棒はどうか。ヒトから餌をもらおうと、鉄棒の上の両脇に、二匹のサルが仁王立ちになって構え、こちらを睨みつけている。そしてまた、そのおぼれにあずかろうと、何匹かのサルが下で待ち構えている。サル山の序列

都会の森の白いフクロウ

詩部門「佳作」 長谷川誠

若かったころ

仕事も恋愛もうまくいかないの
ふてくされて森にねそべりました
口を開けて居眠りしかけると
白いフクロウが
ホウッ ホホウッ と叫びながら
僕の真上を旋回しました えっ？
あなたを探そうと立ち上がっても
もうそこにはいませんでした

その後女神に出会い

都会の森の教会で祝宴を開きました
あなたに祝福されたかったけど
その姿はありませんでした
帰り道 金貨が一枚落ちていたので
拾ってポケットに入れると

悪魔がニヤリと微笑みました

それから仕事で世界を旅し

天使を授かり城も構え

世に言う成功を取めました

でも幾ら稼いでも稼いでも

心臓から血が流れ出すのです

部屋中が血であふれ

僕は悪魔の雄叫びを上げました

恐れおののいた女神と天使は

金貨はいらない

心の手を握って欲しかったのと言って

僕のもとを去っていききました

でも悪魔が僕の目と耳を塞ぎ

何も見えず何も聞こえませんでした

ある日あなたは私を都会の森に呼びました

森は色も香りもいでたちも

二十五年前のままでした

変ったのは魂を悪魔に売り渡した

醜い僕の姿だけ

涙が止まりませんでした

あなたは私の肩に止まり

嘴で心臓に刺さった金貨をえぐりだし

私の涙で紡いだ銀の糸で

心の穴を塞ぎました

天使と女神が空から舞い降り

私の体を森の泉で洗い清めると

息絶えていた私は蘇り

白いフクロウになりました

その脇で悪魔がバタッと倒れて死にました

三人の平和な生活が蘇り

ある満月の夜 ベランダからぼーっと

都会の森の方を眺めていると

ホホウツという鳴き声とともに

あなたが私の肩に舞い降りました

大きな瞳でギョロギョロ私を覗き込み

心に映る天使の微笑に頷くと

ホホウツ ホホウツ と叫びながら

大空に消えて行きました

生まれたときから死がはじまる

詩部門「佳作」弟子丸博道

生まれたときから死がはじまる

生き物はすべてこのことを知らない

ましてはヒトも知る由もない

生まれたことさえ知らないし

なぜ生まれたのかさえも知らない

アギャー オギャーという産声は

喜びの声でも 安堵の声でもない

これから死に向かうという声明だ

やがて思考ができるようになり

死がなにかを知ることになる

死を教えるのが父親ならば

生を教えるのは母親だ

男は女に生を吹き込み

女はその生を育む

死を恐れるのが宗教ならば

生の知恵を生むのは哲学だ

生まれたときから死がはじまる
生き物はすべてこのことを知らない

風に吹かれて

詩部門「佳作」窪田貴子

もう ずいぶんながく
下をむいて
肩をすぼめて
歩いてきたから
翼のある位置も
蝶番が開閉することも
すっかり 忘れてしまっていた

ただ ただ
息をころして
声をおさえて
顔を半分覆って
安心してふりをした
ふれあうことも
あたためあうことも

良しとしない空気の中で
探し合う日々

もう あきた
もう つかれた
もう がまんできない
もう もう ……

それはふるい慣習を脱ぎ捨てられないだけ
押し入れに隠されているわけでも
リンゴを投げつけられるわけでも
砂の穴から出られないわけでもない

もう少し 先へ
もう少し 身軽に
もう少し やわらかく
もう少し もう少し……

さなぎの中で

繭の中で

何になるのか
何をしたいのか

脱ぎ捨てるものを決めかねて
ぐずぐずしているのも もう少し

翼の生える位置がうずいてきたら
蝶番の開閉する準備が整った証拠
あとは 見たい世界を想像して
大きく深呼吸するだけ
背中がピリッと割れてきたら
思いきり胸を広げて
大きく息を吸い込んで
目を見開けば
新しい世界が始まる

頭をあげ
目を開けると

空蟬が
風に吹かれていた

こんなにしょっぱい

詩部門「佳作」 佐伯研

片腕の選手が
しぶきを上げて突き進む
義足の選手が
跳躍板を蹴って舞い上がる
盲目の走者が
伴走者と息を合わせて駆け抜ける

画面がぼやけた
目尻をすくって舐める
こんなにしょっぱいのは
五体満足の自分の
不甲斐なさ涙だ
一所懸命になれない自分の
悔し涙だ

散歩道

詩部門「佳作」 中村福子

毎日、手を繋いで二人で歩いた散歩道を
一人で歩いています
あなたの余命宣告を告げられた日
いつもの散歩で私の目から涙がこぼれて
あなたの手に落ちました
あなたは私の手を握りしめました
その手のぬくもりを思い出して
涙が出てきました
私を受け止めてくれるあなたは
もういないのです
寂しい散歩道はいつまでも続きます

「大切なこと」

詩部門「佳作」 菅井良翔

「この世で大切なこととは何ですか？」
ある人が言った
「愛を育むこと」
女の人が言った
「お金をかせぐこと」
男の人が言った
別の日に同じ質問をすると
「では、あなたに聞きます。
あなたが思う大切なことは？」
皆に問われたその人は、しばらく考えて、
「これには、間違いも正解もありません。」
と。続けて、
「私が思う大切なことは、自分を持つ、という
ことでしょうか。何をすることも自分がそこに
なければ何も出来ないと思いませんか？」
誰もそこから動かなかった

呼吸

詩部門「佳作」 泉 真帆

たねはゾワゾワしている
種はうまれたたくて身が
うまれたたくて内から

じぶんをおおい
ずっと内にとじこめて
守ってくれていた膜

もう準備はととのった
だから外界へ
躍り出よ。そう誰かがいった

たねはゾワゾワしている
種はうまれたたくて身が
うまれたたくて内から

煌々と朝日がさしてきた

机でペンをもっているわたしへ

ガラスの文鎮のなかで

ずっと泳いでいるマッコウクジラへ

つよい朝の光がさしこんだ

鯨はわたしの真っ白いノートにとびだした

ノートに映しだされた鯨に

わたしはしずかに手をさしいれた

鯨はわたしの腕にのって

わたしは鯨の大いなる呼吸になっていった

十三人殺した記録

詩部門「佳作」 イイジマジンキチ

人間とは生の意味を問うものではなく、むしろ
聞いかけられているものであり、自らそれに答
えなければならぬ。

ヴィクトール・E・フランクル

一人目は憎しみで殺し
二人目は命ぜられて殺し
三人目は邪魔だから殺し
四人目は試しに殺し
五人目は退屈ゆえ殺し
六人目は楽しみに殺し
七人目は見せしめに殺し
八人目は汚いから殺し
九人目は世のため殺し
十人目は我が身のため殺し
十一人目は愛が殺し

十二人目はただ殺し

十三人目は己を殺した

これで答えは終わる

そう思わないか、君

夏休みの記憶

詩部門「佳作」 西川由希子

「すぐ戻ります」

裏庭の花に水をやる音が聞こえる

私はただ扉の前に立ち尽くしている

公園の遊具で遊ぶ子どもたちの笑い声が

万緑の中に輝いている

額の汗は拭いても拭いても追いつかない

扉の中からはかすかに冷たい風がこぼれ出ている

「すぐ戻ります」

そう書き残して父は家を出た

父は還暦で私は二十歳になっていた

泣くほどのことではなかった

ただ静かに傷ついただけだった

扉に立てかけられた黒板の上の六文字は

小さくゆらゆらと消えかかっている

エッセイ

私はそれを空中になぞりながら
ここではないどこかほかの場所のことを考えて
いる

水やりの音が止んだ

店主らしきひとが小走りに近づいてくる

裏庭ではいま誰かが夏休みを引き留めるための

呪文を唱えている

総評

鴻巣友季子

二〇二〇年の三月に新型コロナウイルス感染症が世界に広がりがりだしてから、そろそろ二年が経とうとしています。その間、わたしたちは長いこと緊急事態宣言下での自主隔離「ステイホーム」を強いられました。仕事もリモートワークになり、家に閉じこもる時間が格段に増えました。

そのことで、じっくりものを考えたり、本を読んだりする機会も増えたのではないのでしょうか？ 今年の「世田谷文学賞 エッセイ部門」は全体に、自分と静かに向き合い、過去を手練り寄せて、ていねいに書き、未来への一歩を踏みだそうと決意を新たにしている、という作品が多かったように思います。技巧に走らず、銜いのない、誠実な文章にたくさん触れることができました。

堀江敏幸

この二年のあいだ、コロナ禍による活動制限によって、多くの方々が内省の時間をこれまで以上に大切にされるようになったのではないのでしょうか。

なにをどう描いても、同時代の空気は言葉と言葉の隙間に、気泡のように閉じ込められます。それをいつ読者に送り出すのか、間合いをはかるのはとても難しいことです。が、読ませていただいた作品からは、ぶつぶつと小さな音を立ててその泡が湧き出てくるように感じられました。

一度書き手の身体に沈められたものですから、空気は人肌の温度にあたたためられています。そのぬくみに励まされました。

父の遺言

ちち ゆいごん

エッセイ部門「一席」 尾張恵子

まずは甘い果物。今の季節なら梨やぶどう、もう少ししたら林檎。桃も西瓜も大好きだった。でもなんと言っても目がなかったのは和菓子だ。饅頭でもゆべしでもおはぎでも、要はあんこものならなんでもいい。いただきものなどあれば、ご飯前に一人で五つも六つも平らげてしまうものだから、母からいつも叱られていた。

来る途中の駅ビルで買ってきた巨峰と梨、それに薄皮饅頭を仏壇に並べていると、母が花瓶に生けた花を持って隣にやってきた。

「お父さんもこういうのを控えていたらもう少し長生きできたんだろうにねえ」

しみじみ言って、母は線香に火をつけ手を合わせた。

その日わたしは、翌日に執り行われる父の七回忌の法要のため東京から福島の実家へ帰省してきたのだった。

父がとりわけ喜んだのは羊羹で、気がつくとき大きなのを一人で一本平らげてしまっていたこともあった。好物だからと、就職したばかりのころわたしは帰省するときは羊羹を手土産にした。勤め先の近くに羊羹で有名な和菓子店があって、その立派な暖簾の前を通るたびに

「おい、ここのは美味いぞ」と父の声が聞こえるような気がして買わずにはいらなかったのだ。しかし父の好みの大ぶりの羊羹は新社会人にとっては懐に痛い値段で、物理的にもずっしりと重たかったものだから、だんだんと買わなくなった。太りすぎの父の健康のことを考えれば、むしろそれは親孝行だったとも言える。

「体に悪いっていくら言ってもダメだった。甘い物に取り憑かれたみたいだったね。あれはもう、病気だったと思う」

「甘いものだけじゃないよ。脂っこいものも好きだったじゃない。案の定、健康診断で太りすぎと高脂血症を指摘されて、食生活の指導受けさせられたことあったよね。それでちょっとは気をつけるようになるかと思ったら、おれはもう二度と健康診断は受けないからなっ言いだして」

「そうだった、そうだった。大好きな物を食べるなって言われるくらいなら、病気になったほうがいいって考えたんだべね」

母の言葉はまんざら誇張というわけでもない。

「ま、それはそれですごい覚悟ではある」

わたしが笑うと、母は強く首を振る。

「違う違う。お父さんはね、ただただ食い意地が張ってただけ。あの人に覚悟なんてたいそうなもの、あるわけないべした」

たしかに父にはそういう子どもっぽいところ、嫌なことからはとりあえず逃げるといふ傾向があった。

「でもまあ、子どものころひもじい思いをして育ったから、あの執着ぶりも仕方がなかったのかもしれないね。いつもお腹をすかせていて、腹いっぱい食べることばかり考えてたって言ってたよ。猫の煮干しをくすねては猫にかっちゃんかれたんだってさ」

そのころ家にいた猫は鼠除けに飼われていたもので、一緒に暮らしてはいるものの人慣れはしていなかったらしい。

父は会津地方の山間部、新潟県との境に近いあたりの小さな村で生まれ育った。実家は農家で、七人兄弟の末っ子だった。兄たちには力でかなわず、猫たちとわずかな食べ物を奪い合って育ったのかもしれない。

わたしも一度だけ父の生家を訪ねたことがある。今から五十年近く前、小学校に上がったばかりのところだった。まだ高速道路はなくて、自宅のある福島市から会津若松あたりまでは普通の国道だったと思うが、途中から舗装道路はなくなり砂利道になった記憶がある。先に行くにしたがって、どんどん山が深くなり道も細くなっていった。うねうねと曲がりくねった山道を揺られていくものだから、子どもだったわたしは車酔いして何度も吐いた。ハンドルを握る父は、しきりに道の悪さや狭い道ですれ違う車の運転者を罵倒し続けていた。時々助手席の母が「まあ、ちょっとこれ食べたら」とあんパンをちぎって口のなかに押し込む。

空腹になるときめに機嫌が悪くなる父のために、車で出かけるとき母はいつもおにぎりや菓子を持参していた。

カーブが続いて見通しの効かない坂道を登っていくと道幅はますます狭くなって車一台通るのがやっとというくらいになった。ふと見るとすぐ横が崖になっている。こんな道大丈夫なの、本当に通じてるの、道間違えたんじゃない、母がしきりに質す。そのたびに父は「うるせえ、お前は黙ってろっ」と大声で怒鳴りつけた。

どうにかこうにか峠を抜けて遠路はるばる父の生家にたどり着いたころには、辺りはすっかり薄暗くなっていた。見渡す限り田んぼに囲まれた敷地には、茅葺屋根の大きな家と、農機具や様々な道具類が置かれた納屋のようなものが建っていていかにも農家という感じがし、町育ちのわたしにはなにかもが珍しかった。

迎えに出てくれたおばあちゃんの後をついて玄関に入ると、薄暗い土間に黒光りする巨大な生き物がいたので腰を抜かしそうになった。

「なんだ、恵子は牛見たごどねえのが？」

おばあちゃんが笑った。

「だって、なんで家の中に？」

強烈な動物の匂いにむせ返った。

「この辺りはどこも土間さ置いとぐんだよ。雪深いすけな」

おばあちゃんは牛の背中を掌で軽くポンポンと叩いて、そのまま奥へと入っていった。まった。わたしはその場から動けない。牛に目が釘づけになっていた。牛のほうも、横ちょから干し草をはみ出させた口をもぐもぐさせながら、濡れたような真っ黒い瞳でわたしを見ている。

「ごめんなさい、通してください」

身を縮ませて恐る恐る横を通り抜けようとすると、突然「んもおおおお」と牛が声を上げたものだから、飛び上がって一目散に奥の座敷に駆け込んだ。

中に入ると板の間に囲炉裏があった。その奥には広い和室が並んでいて、襖を開け放つと何十畳もある大きな広間になった。天井の高さが普通の家の二階建てくらいあり、中ほどに廊下のように細長い中二階が作られていた。もう使っていない農機具や家具などが置かれて物置のようになっていたが、「昔はあそこでお蚕さん飼ってたんだぞ」と父が怪談でも聞かせるみたいに言った。

夜は、その大きな部屋に布団を並べて寝ることになった。もうお蚕さんがいなくてよかつた、わたしは心から思った。田舎の夜はどんなに静かなんだろうと思っていたのに、電気を消したとたん以外でいっせいにカエルが鳴きだしてびっくりした。何億匹いるんだろうというくらいの大音量で、まあうるさくて眠れない。ようやくとうとうとしたと思ったら、今度は胸の辺りがふいにずしりと重たくなって目が覚めた。なに、怖い、泣きそうになって目を

開けると、猫が乗っていた。着いてから一度も姿を見かけていなかったのこの家に猫なんかいたのかと驚いた。少しうとうとしてふと目を開けると、今度は足元にも一匹、左脇にも一匹が丸くなっていた。

翌朝目が覚めたときには猫たちの姿はなかった。夢だったかとも思ったけれど、台所の隅に小さな皿が何枚か置かれているのを見つけた。皿はどれもすっかり舐めたようにきれいだっただが皿の周りに煮干しの頭とワタが散らばっていた。ひよっとすると幼い父と煮干しを奪い合った猫の末裔だったのかもしれない。

「しかしあんなに食べるのが好きだった人が、最後は点滴だけ、飲まず食わずで何か月も過ごすはめになったんだからね、どんな気持ちだったんだべね」

お茶を入れながら母が言った。

父が脳卒中で倒れたのが六十代の初め、一命はとりとめたものの半身麻痺と言語障害が残った。警察官をしていた父は退職後免許センターで講師をしていたが、その仕事もできなくなった。それから十年余りを家で過ごしていたが転んだはずみで頭を打って硬膜下血腫というのになった。すぐに入院して手術を受けたのだけれど、もともとB型肝炎ウィルスキャリアだったのが手術の後肝硬変へと進行し、そのまま病院で最期を迎えることになった。

「不思議と入院中は、あれ食べたいこれ食べたいって言わなかったよね」

たしかにあの父がずっと点滴だけで胃はからっぽの状態に耐えられるのだろうかと心配していたけれど、昔のようにイライラすることも、何か食べたいと言うことすらなかった。見舞いに行きひとしきりしゃべって話が一段落すると、「さあ食堂に行って美味しいもんでも食べてこい」と送り出してくれたものだった。なんだか申し訳ない気がして「お父さんも一緒に行けたらいいのにね」と言うと、「おれは、これがあるから、いい」と言って、点滴の管を指さした。

いよいよ最期が近くなって、医者から「何でも食べたいものを食べさせていい」というお許しが出た。「何が食べたい？」と訊ねると、「スモモ」と即答した。それなら特別に美味しいものを、と高級果物店でなにやら難しいカタカナの名前のついたスモモを買って求めて父を見舞った。どれほど喜ぶだろうとわくわくして見守ったが、ひと口食べて残念そうに「これはスモモじゃない」と父は言った。「スモモだよ。すっごく甘いでしょ？」と言うと、ああ、と頷いて、「これはスモモじゃなくてさ、モモだ」とすっかり痩せて萎んだ顔で弱々しく笑った。なあんだ、冗談のつもりかと笑い、「新しい品種なんだって。大きくて立派でしょ？」と果物屋で聞きかじったうんちくを語ってみたが、父はあまり関心がないふうで、もう少し食べたらと勧めても「もう、たくさん」と、ゆるゆる首を振った。

おそらく父は、子どものころに食べていたような、おもいっきり酸っぱくて固いスモモが食べたかったのだろう、と今になって思っていた。

ふっと息を吐いてから、母が淹れてくれたお茶を啜った。

「ああ、でも、そういうえば一度だけ、カツ丼の話をしたことがあったよ」

思い出してわたしは言った。手術が終わって状態も落ち着き、話ができるようになってからのことだった。

「前に、お父さんに連れて行ってもらった店のカツ丼、美味しかったですよね」

何か楽しい話題をとでも思ったのだろう、一緒に見舞った夫の和人が話し出した。

「ああ、あそこのカツ丼な、旨いんだ」

父はしみじみ言って目を細めた。

「分厚いとかんかつが揚げたてで衣がカリッとして、それを甘じょっぱい汁でさっと煮てとろとろの卵でとじてあってね、煮汁が染みたご飯まで本当に美味しかった」

揚げ物好きの和人が身振りや顔つきに実感を込めて語ると、「んだ」と父は深く頷いて、「あんまり旨いもんだから毎日のように食べに行ってたな。それでみるみる肥えちまったんだ」と笑った。

「そのせいで市の検診で食事制限しなさいって言われちゃったんだね」

わたしがその話を持ち出すと、父はしまった、というように顔をしかめ首を振った。

「んだからな、カツ丼は、毎日食べてはなんねえぞ」と、戒めるように言ったのだった。

「あれがね、お父さんの遺言だったって、和人はいまだに言ってる」

「遺言？ カツ丼は毎日食べてはならねえぞ、っていうのが？」

「うん、カツ丼食べるたびに罪悪感を覚えるんだって」

大笑いしながら、母は懐かしそうに遺影に目をやった。

「まあ、あの人の遺言ならそんな程度だろうね」

母とそんな話をしたのは、もう十年以上前のことだ。その翌年に東日本大震災が起こった。母の住む福島市に津波の被害はなかったけれど、何年にも渡って家の周りから高い放射線量が計測されていた。

それから五年ほど一人で暮らしていた母も認知症が進んで施設に入り、今年の春、亡くなった。

夏に入ってコロナの急激な感染拡大があって、わたしは初盆の法要もお墓参りも見送ることにきめた。

とくに予定のない夏休み、ふと思立って昔の家から父の実家までの道のりをグーグルマップで調べてみた。現在では東北自動車道と磐越自動車道を乗り継いでいけば、二時間ちょっとで行けるらしい。

歌に思いを巡らせて

エッセイ部門「二席」 中村福子

おじいさん（夫の父）は歌が好きな人だった。家でカラオケができるという、カラオケ用のマイクを欲しがった。夫も私も歌は好きだったが、家でカラオケと言うのはあまりピンとこなかったが、おじいさんがあまりしつこくせがむので買ってあげた。家にマイクが届くと、早速、テレビに取り付けて三人で歌ってみた。しかし、マイクから出る私たちの歌が、回りの家に聞こえないかと気になって私は歌わなくなった。それでも、おじいさんは、カラオケを楽しんでよく私たちの前で歌っていた。そのうち夫も、歌いたい歌が少ないと言って、そのカラオケでは満足できなくなって、私たちは、外のカラオケに行くようになった。当時は、おじいさんは年金生活、夫は、病気のため自宅療養と二人とも働いていなかった。私は、長く勤務していた職場を定年退職はしていたが、非常勤講師として、仕事をしていたので、二人とも、私の仕事の都合がつくのを心待ちにしていた。そして、一か月に一度くらい、私たちは三人でカラオケに行った。そこでカラオケの曲の数は本当に多く、夫はいつも選曲に迷ったものだ。おじいさんは、たいてい、股旅ものか軍歌が多かった。股旅ものでは、画面に出ていないセリフを入れるのでびっくりすることが多かった。おじいさんは若い頃に謡を

習っていて、その当時の仲間と股旅ものを歌うときには、誰かが作ったセリフを入れて歌うのを楽しんでいたと言っていた。ずいぶん粋なことをしていたものだと感心して聞いていた。おじいさんは、軍歌を歌うときは自分の戦争体験を話すことがあった。九十歳を過ぎても、おじいさんにとっては、戦争体験はいつまでも忘れることのできない思い出だったので、時には、話をしながら涙ぐむ時もあった。そんな時は、夫も私も、おじいさんの気持ち落ち着くのをだまって待っていたものだ。おじいさんは、落ち着いてくると気恥ずかしそうに私たちを見るのだった。そんな時、私たちはおじいさんに、もっと戦争体験を話してほしいと頼んだ。そして、カラオケは一時中断になって、おじいさんの戦争体験が始まるのだった。おじいさんはよく、怖かったのは敵国ではなく上等兵だったと言っていた。上等兵に急に後ろから殴られて、振り向くと今度は目の前に拳が見えて、あつという間にすごい勢いで顔を殴られたと言っていた。そして、目の前が何も見えなくなって、いつの間にか地面に倒れて、そこをまた上等兵が足で踏みつけるのだと言うのだ。夫が、何か怒らせるようなことをしたのかと聞くと、何もしていないとおじいさんは答えていた。おじいさんの話では、上等兵はもっと上の兵隊に殴られ、その上の兵隊はもっと上の兵隊に殴られて、結局、上にされたことを下に行っているのだろうということだった。たぶん、この戦争は負けると思っ、みんなイライラしていたんだろうとも言っていた。それで私が、おじいさんに、おじいさんも自分の下の兵に同じことをしたのか聞いたら、おじいさんは笑いながら、自分より下の兵はいな

い、自分はずっと下だったと言った。後になって、夫は私に、おじいさんは体が小さかったから上に上がれなかったんじゃないかと言った。そんなわけで、三人でカラオケに行くとき最後は歌うことよりおじいさんの戦争の話になってしまうことが多かった。おじいさんはよく私に「岸壁の母」を歌ってほしいと言った。私が歌うと、セリフはいつもおじいさんが言うのだった。他にも「あゝ、モンテンルパの夜は更けて」や「裏町人生」などもデュエットでよく歌った。今思うと、もっと戦争の話をおじいさんから聞いておけばよかったと思う。おじいさんも九十七歳まで生きた。満州で終戦を迎え、なかなか日本に帰れず、大変な生活を強いられていたようだ。それでなのか、おじいさんには強さを感じたことがある。あんな大変な時代を生きぬいてきたのだから、そうそうには死なないぞと言う強さを、おじいさんに感じたものだ。おじいさんとは対照的に夫は体も弱かったこともあるが、心も弱かった。結婚してすぐに腰痛で倒れ「腰椎分離すべり症」と診断されて手術をした。その五年後に、その時に手術した骨が折れて再手術をした。それが原因なのかわからないが、夫は「脊柱管狭窄症」になり、夫の背骨には器具が取り付けられて、背骨を一本にする手術が行われた。それから夫は不自由な体になり、やがて、膝の半月板が損傷して人工関節を入れた。夫は入院、手術の度に仕事を休職したが、そんな生活の中で、夫の心が変になっていることに、私は全く気づかなかった。夫は「うつ病」を併発していたのだ。この時私は、自分が夫の病気に寄り添っていなかったことを痛感した。夫が休職するたびに、早く治して職場復帰を急がせた

ことが、夫を追いつめていることに気づかなかったのだ。当時はすでに家を建てて、ローンの支払いや、同居している夫の両親の世話や育ち盛りの子供たちにお金がかかることも多く、私は夫の職場への復帰を願わずにはいられなかったのだ。夫のうつ病はすでに深刻な状況で、いつ自殺をするかわからないと言われ、夫は精神科に入院した。それから夫は精神科の病院に入退院を繰り返すようになった。ある日、自宅で原因不明の発作を起こして救急車で運ばれた。その後、一週間意識不明で、そのまま死んでしまうのかと思ったが、奇跡的に意識を取り戻した。それから、私は夫に、もう働かなくていい、生きていてくれればいいんだからと言うと、夫は嬉しそうに笑った。それから夫は仕事を辞め、家で好きなことをしながら穏やかに療養生活を送った。カラオケで歌を歌う時の夫はいつも直立不動になり、一曲、一曲を丁寧に正確に歌った。私がおもつと気楽に歌うように言っても、夫は、こうしないと歌えないと言って、その姿勢を変えなかった。私は、カラオケ店の前を通ると、そんな夫やおじいさんのことを思い出す。

その二人が同じ年に相次いで亡くなってから、しばらくは歌を歌う気持ちにはなれなかった。もっとも、足が不自由になって私の家に引き取った私の母が、二人が亡くなるとすぐに寝たきりになっていたので、母の世話に忙しく、歌のことなど考えることもできなかった。母の介護は大変だった。動けないはずの母がベッドから落ちたことがあった。その母を持ち上げるには容易ではなかった。その時に私は腰を痛めて、母の介護が本当に大変になったが、

そんな生活も長く続くことはなく、母は夫とおじいさんの後を追うかのように静かに死んでいった。

母が亡くなってからいつまでも、私の腰の痛みが治まらず、私は整形外科に行った。そこでレントゲンを撮ったら圧迫骨折だと言われ、治療を続けることになった。それからもう三年も経っているが、圧迫骨折は治っているのに腰の痛みはなかなかよくなるらない。その上さらに、腰をかばっていた膝にも痛みが出て、しばらくは、膝に溜まった水を抜いてもらい、ヒアルロン酸の注射を打っていた。これまで大した病気もしたことはなく、医者に行くことなどめつたになかったのに、一週間に一回の通院はいまだに続いている。ある時、あまりにも疲れがひどく、内科を訪ねたら、極度の貧血と言われて、すぐに胃カメラの検査を受けた。結果は胃潰瘍で、薬での治療が始まった。整形外科と内科に通う日々が続いて、私は、あらためて夫は本当に大変だったのだと言うことに気づいた。夫に申し訳ないことをしたと思いつながら、私はこのまま夫のそばに行きたいと思った。そんな時に、たまたまテレビをかけたら、軍歌を歌っている画面が出てきて、思わずおじいさんの顔が浮かんだ。おじいさんの生に対する執着心がよみがえってきた。私は生に執着していたわけではないが、おじいさんより、仕事への執着があった。私は、小さい頃から教員になることが夢だった。私が大学を受験する頃は、父親が事業に失敗して、とても大学などに行かれる状況ではなかったが、私

は、親にわがままを言って大学に行かせてもらった。それからはアルバイトをしながら大学を卒業して教員になることが出来た。初めて教壇に立った時に、感激のあまり、生涯、教員の仕事を続けようと思った。そうして、四十年以上もたった今も教職の仕事を続けている。仕事に夢中で、自分が結婚できるとも思っていなかったが、縁あって結婚し二人の子供にも恵まれた。子育てと病気がちの夫や同居している夫の両親の世話などで大変な日々だったが、いろいろな人に助けてもらいながら、仕事を続けてこられた。そんなことを考えていたら、やはり生涯現役を目指して頑張ろうと言う気持ちになった。

最近、家を二世帯住居にリフォームした。息子一家と家を分け合って暮らしている。私の住居部分は一階にあり、そこで一人で暮らしている。もう自分には世話をしなければいけない人が誰もいないことや、お金の心配をしないいいことで自分は身軽になったのだと思えるようになった。勿論、夫や親のことを思わない日はない。しかし、これからは、自分のために生きようと思った。それは亡くなった人への供養にも繋がるのではないかとも思った。息子の住まいと私の住まいには防音壁が入っていると言うので、私は一人で、おじいさんに買ってあげたカラオケマイクを握って歌うようになった。よく夫やおじいさんが歌っていた曲を歌った。最初は、二人のことを思い出して涙があふれて歌えなくなることが多かったが、この頃は、涙を流さずに歌えるようになってきた。そうして、私はだんだんと自分が好きだった歌も歌うようになった。私の歌は昔の歌が多い。親が歌っていた歌を歌っていると、私は

五十年以上も前に亡くなった私の父のことを考えるようになった。父の事業がうまくいった時のことだ。父は、よくお得意さんを家に招待して宴会を開くことがあった。宴たけなわになってくると必ず歌がでてきた。民謡やら流行歌やら軍歌が次々と歌われた。お客さんが帰った後で、父は私に、軍歌を聞いていると、自分は体が弱くて戦争に行っていないから、何か後ろめたさを感じてつらくなると言ったことがあった。父は七人兄弟で、女が三人、男が四人だった。男兄弟の中で父だけが体が弱くて戦争に行っていないかった。父の兄弟たちはよく私の家に集まった。お酒を飲んで酔っぱらってくると誰かが歌いだし、それから大声でみんなが歌い、そして最後は軍歌になった。軍歌が始まるとみんなが涙声になって来て、誰からもなく、戦争の話が始まるのだった。そうすると、父はいつも申し訳なさそうに小さくなって黙って話を聞いていた。戦争に行かなくてよかったじゃないかと私が言うと、その当時は非国民だったからと自虐的に言うのをいつもかわいそうな思いで聞いていた。私は戦争に行った人にも、戦争に行かなかった人にも、戦争は誰にとっても本当につらいものなのだとつくづく思った。

いろいろなことを思いながら、毎日、一人で、家のカラオケで歌を歌っている。家族のとばかりではなく、その当時の社会のことや、学生生活のことや、友だちや、アルバイト先の人たちのことなどが次々と思い出されてくる。いろんなことがあったなとしみじみした気持ちになる。今、コロナ禍にあつて、昔の仲間と会えない日々が続いている。しかし、それ

はコロナのせいばかりではない。私も、もう七十歳になった。相変わらず、足腰の痛みは続いている。それでも仕事に行っているがいつまで続くかもわからない。つい数年前は、友だちが一人で生活をしている私のことを気遣って、遠くからきてくれたりしたが、その友達も足腰が痛くなって遠出ができなくなった。生きていても元気でなければ会えないのだ。そんなことを思うと、どこにでも行かれて、何でもできて、たくさんの夢があつた若い頃が無性に懐かしくなってくる。今年二月に娘に女の子が生まれた。その孫に会いに行くと、孫は会う度に変わっている。少しずついろんなことができていくのだ。表情も豊かになり、自己主張もして、たくましく生きている。息子の子供は四歳になって、もう、いろいろなことが一人でできるようになった。そんな孫たちに反して、私は少しづつできないことが増えている。自分に自信がなくなってきた。私は、教師として働いていることも限界にきているのではないかと思うこともある。しかし、教員になった頃の流行歌を歌ったりすると、勇気が湧いてきて、まだまだ頑張ろうと言う気持ちになってくるのだから不思議である。歌と言うのはそれほど人にの気持ちに大きい影響を与えるものであることを改めて感じる。一時間くらい歌うと疲れてきてカラオケをやめる。

カラオケの画面からテレビの画面に変えると、ニュース番組が目に入ってくる。現実の世界に連れ戻されて、気持ちが暗くなることがある。今の世の中を嘆いてみても、私には何もできない。いや、今までだって何もしてきてはいない。ぬくぬくと七十年を生きてしまっ

たと言うやるせない思いがこみ上げてくる。私は、コロナ禍の中で開催されたオリンピックのことを考えた。オリンピック開催までの間に、不適切な発言で何人かの人がオリンピックの仕事から姿を消した。その人たちの、あきれするような言動の数々の報道に絶望的な気持ちに陥ったりもした。

私たちの生活は昔に比べれば本当に豊かになった。それなのに、本当に豊かにならなければならぬ人の心が貧困になっていくような気がするのにはなぜだろう。昔「狭いながらも楽しい我が家」などと言う歌があった。貧しくても周りの人と支え合って心が豊かになるのを感じた。人の心の優しさにどれほど救われたことだろう。

歌の世界で描かれている、人生の悲哀、夫婦愛、兄弟愛、家族愛、友情、希望、それらは歌の世界だけののだろうか。歌を歌うことで、自分も、こうありたい、こうあるべきと思う気持ちが出てくれば、いつまでも人を思いやり愛し合って行かれるのではないだろうか。一人で、カラオケで歌うようになって、ある時は楽しく、ある時は切なく、いろいろな思いを抱くようになった。それでも、私はずっと歌っていききたい。そこには私が生きた世界がたくさんあるからだ。

中村裕 —ある俳人の想い出—

エッセイ部門「三席」 松本昂幸

用賀区民会館は、住宅街の路地裏にあった。二階建ての建物の玄関を入った右手の受付にひとり、穏やかな顔つきの女性職員がいたが、ほかに人の気配はなかった。聞けば老朽化がすすみ、一年後には閉鎖される予定とのことだった。

二階への階段を上がり、蛍光灯の消えた薄暗い廊下を突き当たりまでゆく。引き戸を開けると、詰めれば六、七十人は座れそうな集会所となっていた。そこが、「現代俳句講座」の教室だった。

区の担当者に電話で申し込んだ際、生徒は七人いると聞いていた。それにしてもその場は不釣り合いに広く、しかも時間ギリギリだというのにまだ二人しかきていない。

ひとりは余分な肉の削げた精悍な顔付きの初老の男性、もうひとりは朗らかな笑みを浮かべた小柄な女性。俳句の教室はここですかと尋ねると、二人は声をそろえて間違いないと答える。まだ皆さんおそろいじゃないのかとかさねて訊くと、男性がこれで全員だという。私は長机が整然と並ぶ室内を見渡した。

「三人にはちょっと広すぎませんか？」

「ほかに使う予定もないことだし」

そう答えた男性が俳人の中村裕で、もうひとりのみどりと名乗った。定年退職を機に俳句をはじめようという女性で、その点は私とおなじだった。

ただし、その時点では、私には本格的な俳句を学ぼうという意欲は希薄だった。会社を退いて日も浅く、突然手に入れた自由な時間を持て余していた。そんなとき、たまたま目にした区の広報誌の案内に、何気なく応募したにすぎなかった。

学生時代、私は戦中から戦後にかけての現代詩をよく読んでいた。自分でも書き、詩誌などに投稿していたものだが、卒業し、社会へ出ると同時に書くことをやめた。就職先の職場には、文弱の徒を侮る風潮があったからだが、私自身にもそれに逆らおうという気概が欠けていた。

六十歳になるのを待って、私は再雇用を辞退し、ためらうことなく退職した。その裏には、学生時代に親しんだ文学への情熱を取り戻し、創作に取り組んでみようという想いがあった。そうは言っても、詩の若書きを再開する気にはなれない。取り敢えず、季語など特有の約束事に縛られた伝統文芸を、余技のひとつとして学んでみよう。それが俳句教室に応募した動機だった。その時点では、芭蕉の奥ゆかしい俳諧以外の句は、ほとんど読んだことがなかった。

その日は、裕が用意してきたプリントで俳句の成り立ちを学び、帰り際に彼の著作「俳句鑑賞四五〇番勝負」（文春新書）を渡された。詠むまえにまず読むことを勧められたのだ。そのうえで七句詠んで、次の講座前日までに、彼の自宅までファックスで送るよう告げられた。それから毎週水曜日の午後三時、用賀区民会館の集会所での師ひとり生徒ふたりだけの「現代俳句講座」がはじまった。

新書判三百ページに及ぶ「俳句鑑賞」には、見ず知らずの俳人の句が細かい文字でびっしりと紹介されている。正直なところ、読むのが億劫だった。

私にとって、イメージの膨らむ詩語を選ぶことはさほど難しいことではない。それを十七音の韻律にまとめ、ただ季語を入れるだけのこと。七句と言わず、十句を超えて作ることで、わけもないことのように思われた。

読むよりは詠むことだと、歳時記だけをたよりに、さっそく実作に取り掛かった。所詮は趣味のひとつにすぎない、あまり力を入れず、さっさとものにして卒業しようという、いま振り返ればなんとも不遜な心構えだった。

裕は、そのような姿勢を、まずは矯めようとしたのだろう。指導は苛烈をきわめた。彼は私の習作がいかにか散文的で冗長なものであるか、一言一句を吟味しながら容赦なく切り捨てる。

彼が朱を入れた後にはなにも残らず、こんなものは廃棄処分だと冷酷に言い放つ。多少見どころがありそうとなれば、余分な語句を切り捨て、語順を入れ替え、姿の異なる句として

再生させる。だが、もはやそれは作者である私の見知らぬ句となった。

なぜ七人の先輩たちが一度にそろってやめたのか、その場で謎は解けた。裕には趣味の俳句を教えるつもりなど、さらさらなかったのだ。

彼にとって、俳句は面白半分に取り組むものではない。だれもが軽視すべからざる神聖なものだった。私とおなじく、その七人もおそらく余暇を楽しむつもりで教室を訪れたに違いない。その思惑がこなごなに砕かれたのだ。

ところで、私の場合、詩を書いていた経験は、句作のうえで助けにならなかった。現代詩によって育まれた語句の用法は、俳句とは異質のものなかもしれない。講座が終われば、提出した七句のうちのどれひとつとして認められない屈辱に打ちひしがれる。毎回その繰り返しだった。

一句でも裕を瞠目させるものを詠みたいと、やっと目を通した「俳句鑑賞四五〇番勝負」だった。だが、そのなかで取り上げられている句の意味が、一読しただけではわからない。詠むだけでなく読むことすらできないのかと、絶望的な気分になるばかりだった。

進歩する手応えを得られないまま、ずるずると時間だけが過ぎてゆく。句作の勘所がなかなかつかめず、徒に華美な修辭を重ね句意はますます不明となる。酷評されて家へと戻る街並みは、しらじらと虚ろに見えたものだ。

もともと飽きやすい質である。子供のころ、親に強制されて始めた稽古事はことごとく途

中で放り出した。もともと軽い気持ちではじめた俳句である。苦痛に感じてまでつづけることはない。

そうは思いながら、自身にたいしてもストイックな裕の姿に、私は無言のうちに引き留められていた。

先立つこと一年前、裕は膀胱癌の摘出手術を受け、人工膀胱を着けていた。それでも、完全には切除しきれずに、癌細胞の一部を残したままだった。

その体で羽根木から用賀まで、電車を乗り継ぎ四、五十分かけてやってくる。体調が悪ければ無理をしないで休んでほしいと私たち生徒が言えば、自分の体のことは自分が一番よく知っているのだからと笑って取り合わない。

裕にとっては残された貴重な時間だったはずだ。それにも関わらず、けっして飲み込みが早いとは言えない初心者相手に、時間を惜しまず句作の指導をつづける。私は行けるところまで食らい付いてみようと思った。

講座のなかで裕が繰り返し伝えようとしたものは、俳句の基本中の基本である有季定型であり、切れ字の効用だった。また、抒情に流されるのではなく、事物に感情を託す寄物陳思を旨とすることを説いた。それを酷評や挑発によって、手っ取り早く感得させようと思うところがあつたのかもしれない。

教室にいるかぎり、裕の舌鋒が衰えることはなかったが、無遠慮な直言も、時に見せる人

懐こい笑顔が中和した。やがて私は、彼が生徒それぞれの美質を認め、伸ばそうとしているらしいことに気付きはじめる。学びはじめて一年も経つころには、その指導ぶりにも人柄にもすっきり馴染んでいた。

ところが、用賀区民会館の閉館とともに、「現代俳句講座」は終了するという。その時点で、私には達成感がまるでなかった。ここで止めれば、いままでの苦労が水泡に帰すという気がしてならなかった。

私はみどりとともに、これからも俳句を学びつづけたいと訴えた。その申し出に、裕は歓迎の色を浮かべながらうなずいた。ただし、体調が思わしくないので、これまでのように毎週というわけにはいかない。隔週に減らすということかどうかと答える。

私たちが羽根木まで出向くと言っても聞こうとしなかった。私の自宅は桜新町、みどりの住まいは二子玉川である。その中間のどこかにしようと、以後用賀周辺の施設を転々とすることになった。

半ば無理強いしてはじまった私塾である。腰を据えて俳句に取り組むつもりにもなっていない。私は「現代一〇〇名句集」（東京四季出版）を全巻そろえ、そこに収められたさまざまな俳人による百冊の句集を、すこしずつ拾い読みしていった。

裕の句集を初めて手に取ったのもそのころのことだ。「石」という勇壮な揮毫の下に、フランス語訳が添えられた洒脱な装丁のもので、その内容も私の俳句への固定観念を覆す斬新

なものだった。

地球にそら砂の軋みを体ぢゆう

暮れてゆく化粧合板日本かな

ペランダに海豚くる日のための音楽

いずれも裕がそれまでに講座で繰り返し語ってきたものとは異質な句ばかりだ。季語を排し有季定型にさえこだわらず、欧風のリズムを湛えながら、現代日本社会の実相を透徹して見据えている。

私にとって、それらの句は懐かしい肌触りのものだった。若いころに親しんだ荒地派の詩人たちの美意識や批判精神を思い起こさせる。

中村裕句集「石」（鞆堂）の全編に流れるものは、伝統に根差した革新の爽快な風である。私は俳句を持つ多様な可能性に目を開かれるとともに、裕の全人格によく向き合えた気がする。その根底には、大勢におもねろうとしない反骨精神があった。

その年の夏、新たに女性がひとり加わった。恵子と名乗るそのひとは、句誌への投稿が取り上げられるほどの実力者だった。彼女の参加によって活況を呈した教室のありさまを、裕も喜んで見るように見えた。

そんなある日のこと、裕は教室に入ってくるなり、今日は目の覚めるような一句があったと言い、実に晴れ晴れとした表情を浮かべた。恵子の句でも取り上げるのだろうかと思ったのだが、彼が読み上げたのは、意外にも私の句だった。

サハラには滝となるべし天の川

かつて車を走らせながら眺めた砂漠の星空を思い出し、何気なく詠んだものだった。むしろペン先からほとぼしり出したと言ったほうがよい。それが、はじめて彼の審美眼にかなったのだった。

うれしいのもさることながら、ますます俳句というものがわからなくなった。どれほど言葉を精選し、表現に工夫を凝らしても認められず、ふと口をついて出た言葉が受け入れられる。いったい何を基準に、良し悪しが決まるというのだろうか。

ともあれ、それが手応えのある一步となったことは確かだった。思い迷いながらも、それからは極力修辭を削ぎ落し、一瞬の情景だけに焦点を当て、句意を単純化する方向へと進みはじめる。

しかし、そこから先は長くはつづかなかった。外見は変わらずとも病魔は裕の体を内側から確実に蝕んでいた。

秋になると癌は肝臓に転移し、入院治療によって講座は中断する。ただし、あくまで休止であって、中止ではないと裕は言い張る。抗癌剤治療を終えると、彼はふたたび用賀にやってきた。相変わらず、自分の体調は、自身が一番よく知っていると繰り返す。

そのような中断を二度経たのちに年が改まり、その直後に、長期入院を余儀なくされたこと、本人から電話連絡を受けた。退院後にあらためて知らせるのでしばらく待ってほしいという声は、いかにも弱々しく掠れていた。

二月早々に、ふたたび電話があった。治療が長引いており、いつレッスンを再開できるか見通せないとのことだった。その声はますます弱り、体力が衰えるいっぽうであることをうかがわせた。そして、それが裕との最後の会話になった。

二〇一七年二月一九日、裕は北里病院のベッドのうえで、家族に看取られながら永眠する。享年六十八歳。安らかな最期だったという。

裕は新興俳句の巨匠三橋敏雄に師事し、その最側近と自負していた。同門には遠山陽子や池田澄子がいる。四月下旬に都心の某会場で行われた「送る会」の発起人には、そのふたりをはじめ、彼の句友が名を連ねていた。

招待状は私にも送られてきたが、みどりと恵子が出席するというので、出席を見合わせた。ちょうどその時期に海外旅行に出かける予定を立てていたからだが、仮にそうでなくとも、会に参加するのは気が引けた。

私は裕にとって、従順なばかりの生徒ではなかった。しばしば彼の講評に食ってかかり、癌を患う彼にあえて死を詠んだ句を見せたこともあった。それを内心悔やんでいた。

帰国後、私はふたりの生徒に会のようなすを尋ねた。席上、盟友の俳人たちから、裕が私たち生徒との集まりを、とても楽しみにしていたと伝えられたとのことだった。

素人の型に嵌らない句と出会い、それを素材にして新たな表現の可能性をもとに探る。そこにはそれなりの喜びもあったということか。私はいくぶん気が軽くなるのを覚えた。

裕は俳句の解説書など数冊の本を著しているが、生前上梓した句集は「石」の一冊きり。敏雄の激賞にもかかわらず、その句集は俳壇から黙殺される。

句作に半生を捧げた裕は、打ちのめされたように感じたに違いない。その傍らでは、陽子も澄子も句集の発表を重ねてゆく。そのたびに、彼は内心に屈託を募らせずにはいられなかったことだろう。

おそらく「現代俳句講座」は、裕の報われない句業への無念を鎮め、句に懸けた志を後続に託す場だったのだと思う。その想いが重い病を押してまで、私たちへの指導を続けさせたのだ。

改めて句集「石」を手にとれば、折節の情景が目につかび、不遇だった俳人の孤高の心境が沁みてくる。私にその作風を真似できるはずもないが、裕のもとで学んだ二年あまりの歳月は、濃密な、また慕わしい時間として、記憶に深く刻み込まれている。

空そらになる

エッセイ部門「三席」 金子トシ子

「犬。お嫌いですか？」不意に頭上から、声が出た。若い男のスタッフが隣に立っていた。足許に足の短い小犬がチョロ／＼していた。背の中央からすっきり分けた茶色の直毛が美しく光っていた。その内、隣の利用者の方へ、いくらか近付いた時、その方が大事そうに抱え、何時迄も抱えて撫でていた。何日前か、「小犬を飼っているんですよ。何時も留守番させて淋しがらせているので、こゝに来られる御老人は、犬がお好きの様ですから、今度連れて来ます。」と言われたのを思い出した。

私が、小学校二年の八月三十一日だった。一年生で結核になり、夏休中、その頃いた叔父さんの家で寝ていた。やっと、回復したので、二年生の夏休は両親兄妹の家で過してよいという事になったらしい。その日の午後、父に付添われて田園調布の叔父さんの家へ帰って来た。着替して玄関を出た。三段の高い階段の上に立った。ムツとした。熱い日射に照された。これから、どう過すか。広い通りには子供はおろか一人居なかった。僅かな水溜りに赤トンプの小さな群があった。近所の学校の友達の家に行こうと思った。階段を降り広い道路を

渡り住宅のある一角のやゝ細い道に出た。右側は二戸分の空地で広い野原になっていた。その先は、二戸の住宅を仕切る細い道で突当りは家を囲む高い樹木がビッシリと立っていた。キャワ〜と子供達の楽しそうな声が聞えて来た。私は嬉しくなって、葉越に眺めた。母屋の藤棚の間に輪ゴムの網を張って跳越す遊びをしていた。女の子が軽くスッと跳越えた。「ドッ。」と歓声があがった。私に出来そうも無かったが、「遊びましょ。」と、呼んだ。返事が無かったので迷ったが、暫くおいて、又、声をかけた。と、すぐ前の木の葉越で、「誰か呼んでいるわよ。お返ししなくても、いゝの。」と声が出た。「いゝのよ。店屋の子だから。」彼女の冷い声が響いた。私は、「ガン。」と頭を撲られた気がした。「そうなの。」訝気な声が出た。と、暫くして「じゃあ、皆の所へ行きましょか。」と声が出て、二人連立って去って行った。体が硬直した。やがて、静かに、音を立てない様に重くなった足を一步、一步、運んで後退りした。その細い道の両側には、低く茶の木が植えられていた。ポック〜と咲く白い小さな花は涙ぐんだ目に、愛しく写った。やゝ広い道に出た。空地は、子供達の遊び場になっていた。雑草が繁茂して居た。ひどい草いきれが広がっていた。端に一本の木が残っていた。今迄木に登った事は無かったが、すぐ登りたい衝動に駆られた。枝は細いが、しっかりと左右に張っていて、容易に登れた。家々は低く沈み、空だけが広がった。気が良かった。どれ程、そうしていたか。やっと、気が付いて降りる気になった。広い道路に出た。そうだ。一人で石蹴をしよう、と思った。蠟石を取りに家へ戻った。理髪店の周囲を囲む土堤

の上を開いたガラス戸に掴って昇った。職人が革でナイフを砥いでいた。次いでセルロイドの透けるマスクを着けて、客の髭を剃っていた。席には全部、客で一ぱいだった。皆忙しうだった。家へ入って二階への階段を登っていた。叔父さんと叔母さんの大きな声が聞えて来た。突然、私の名前が出て来たので吃驚して足が止った。

「籍を入れるって言うの？」

「何時迄も、この儘って言う訳にはいかないよ。」

「じゃあ、あんたはあの子に、家の財産全部、くれてやるって言うの。私は、反対ですよ。」

あんたが、何と言ったって、私の目が黒い内は、鏢びた一文だって、くれてやるもんか、絶対許さないからね。」

「そうは言っても、ゆく〜は誰かに面倒見て貰う事になるんだから、あれも三歳で家に来て、どうにか、居着いている様だし、学校の事もあるし、そう何時迄も放って置く訳には行かないよ。予後の事は、又後で、相談する事にして、いゝじゃないか。今日明日どうっていう事じゃ無。」

「あんたは人が良いんだから、騙されているのが判んないの。一度入れたが最後釜の下の灰迄も取られるんだよ。もうお終いだっていう事が判んないの。判った。あんたは、あの子が可愛いんだ。あんたの兄さんの子だから。そうして、あんたの財産みんなあんたの身内にくれちまうつもりなんだ。いゝですよ。私の身内なんか、どうでもいゝんだ。病気になったっ

て、のたれ死しようよと、あんたが一番大事なのは、金なんだから、銀行員様なんだから、初めから算盤はじいていたんだ。仕事で行って居た、社長の家の女中に目をつけたんだ。旨く騙して手に入れたね。皆自分の身内に呉れちまうんだ。私がどんなに苦勞したか、何とも思っていないんだろう。籍でも何でも入れるがいゝさ。みんな、あんたの物なんだから。私の物なんか、何にも、無いんだから、勝手にするがいゝさ。あの子にやろうと、溝に捨てようよと、あんたは大学出の教養あるお方なんだから、小学校しか出ていない卑しい女と軽蔑しているんだろう。何が相談だ。初めっから私の事なんか、何一つ聞くつもりは無い癖に、何もかも勝手に決めちまう癖に。」

「お前は直ぐ、そう言う、それじゃ話に成らない。」

「どうせ、そうでしょうよ。あんたと違う教養の無い女ですよ。どうせ私は、色の黒いお多福ですよ。誰かさんの様に色が白くて綺麗な人とは違うんだから大学出のお父さんで、女学校だのお茶、お花だの、どこの世界に十人もの職人の三度の食事から面倒見て、おいしい物も食わず、粗末な姿なまじして文句も言わず、辛抱するお嬢さんが居るものかね、猫の子の様に次から次へと子供を生んで籍だの、何だの、言わなくなつて楽に暮せるだろうからね。」

「お前がそこ迄言うなら言わして貰うが、お前があれを連れて来る時、あんなに熱心だったじゃないか。最初から艇でも渡さないと判っていたんだ。お前は毎日の様子上がり込んで攻め立てたそうだね、お前は旨く騙したつもりでも、嘘をついている位の事は判っていたんだ。」

それを向うにバラス程恥知らずでは無いがね。一体どんな手を使ったんだ。そう言えば私の家の長男の息子が五歳位だったかな、貰って直ぐ疫病で死んだが、殺したと思われても仕方がないよ。それもあるし、寄こさないと判っていたんだ。旨く取上げたじゃないか。」

「一人位呉れたって罰は当たらないよ。物惜しみして、本当に手古摺らせて、全く厭な女だよ。それに、あの子は本当に強情で、可愛気も、何も、ありやしない、いくら脅しても、賺かしても、応えが無いんだから、泣出してもするかと思つたら、涙一つ溢す訳でも無し、牡蠣の様に黙り込んでジッと私を見るんだから忌ま忌ましいやら憎たらしいやら、あんな小さな子に馬鹿にされて、朝に、夕に、叔父さんと叔母さんのお陰で食べさせて貰って生きていられて、有難いという気持が全く無いんだから、頭一つ下げるじゃ無し、お大尽みたいにふんぞり返っているんだから。」

「私は後になって判つたんだよ、お前に旨く騙されたんだと。私に片棒担がせたね。おかしいと思つたんだ。嘘を吐いたのは、お前だ。私も共犯だ。それを向うに言うほど、恥の上塗をするつもりはないがね。」

「何を言っているんですよ。役立たず。あの子を連れて来られたのは、私の力なんだから。あの子は私の物さ。どうしようと、私の勝手さ。私がどんな手を使おうと子供を手放した母親が悪いんだ。私があの子に勝つたのさ。あんたに指図される覚えはないね。言つとききますよ。籍に入れるのは絶対反対ですからね。」

大人の話は聞いてはいけなさと常日頃言われているのを思い出し、音を立てない様に階段を昇り廊下に出た。奥の六畳の襖はピッタリと閉っていた。二人の声はまだ続いていた。廊下をソツと歩き奥の職人の部屋の一部から蠟石を取出した。外に出ると家側の道路に細く家影が落ちていた。蠟石で横に一本線を引いた。丸を一つ。次に丸を二つ。次に不定形図。使易そうな平たい小石を探し見つけた。石蹴を始めた。線の外に立って一つ丸。次に両脚を開き二つ丸。不定形の地面に石を投げ、足の爪先で石を動かし次の一つ丸に駆込むのだが、何度やっても出来なかった。私は疲れていた。溜息を吐いてぼんやり辺りを眺めた。さっきよりもっと多くの赤トンボが群れていた。赤い尾を垂直に立てて地面に触れる、と、瞬間、鋭く空気を裂いて飛昇する単純な動作を繰返していた。空を見上げ目を戻した時、何か過ぎる物があった。ソロ／＼と逆に目を戻した。白い大きな犬が坐っていた。フサ／＼した毛は風に靡き金色に煌めいていた。美しく気高かった。呆然と、眺めた。何時から居たのか。どこから来たのか。全く、気付かなかった。この辺りで犬を見たのは初めてだった。私は、又、石蹴を始めた。以前、何回やっても旨く出来なかったのに、其後何度やっても旨く出来た。終って最後二つ丸に着くと、そこに犬が居た。何時の間にか夕暮が近づいていた。この犬をどうするか。私は暫く、ジツト、犬を眺めた。首の辺りに長い毛の隙間から首輪が覗いていた。犬の傍に坐って静かに毛を別けて、首輪を見た。住所は駅上の、学校の友達の家隣だった。外国文字の名前にはカタカナがふってあった。タド／＼しく読むと犬は突然スックと立上った。

「オイデー」「お家に帰ろうね。」と声をかけると私の後についてゆっくりと歩き始めた。駅への急坂に來ると私の顔を見上ると、突然、大きく体を翻返し急坂を馳登った。あの静かで穏やかで、気高く美しい姿からは想像もつかない、逞しく、生命力に溢れた躍動だった。戻って來ると私を見上げ、その動作を何度も繰返し急坂を登り駅前に着いた。線路際の道路を少し歩いて踏切を渡った。犬は私の足許を離れず、静かについて歩いていた。その家は駅の上の邸だった。低い竹垣に囲まれた広い芝生の中央に二階建の木造の和風の家だった。枝折戸に呼鈴が有ったので押した。戸口から若い着物を着た婦人が踏石の上を転げる様に現れた。私は「犬を連れて來ました。」と言った。「マア!!」「いましたの!!」「良かったわ。」「どこにいましたか?」「駅の下です。」と私は言った。「そんな遠くに!!」「どうして!!」「こんな事、今迄一度も無かったものですから、家中で、手分してあちこち、探してどこにも居なくて、あの犬は——もう——ですから。」「今、警察に届けようか、と、相談していた所でしたのよ。」「お嬢ちゃん。有難うございました。遠くから業々連れて來て頂いて、本当に何とお礼申上げたらいいのか、本当に有難うございました。」「婦人は深く頭を下げた。門の枝折戸を開くと、犬は母屋へ向って芝生の中を力なく、ヨタ／＼と歩いていた。呆然と見つめていた。「お嬢ちゃん!!」不意に背後から呼ばれて吃驚して振返った。「本当に有難うございました。これをどうぞ。」と白い半紙の包を目の前に出した。私はびっくりして、イヤ／＼をしながら両手を後に隠した。「そんな大層な物ではないんですよ。失礼かと思いましたが有あわせ

で、遠慮なさらないで、気持だけですから。」私はその儘の姿勢で居るのを見て、暫く考えで居る様子だった。「お嬢ちゃん家の犬が好き。」私は頷いた。「犬がお嬢ちゃん有難う。一緒に遊んで頂いて、家送って頂いてありがとうって。それをとうぞ。」私の手は柔い温りに包まれた。それは記憶にない母の手だった。犬がとうぞと優しい目で見上げていた。気がつくとは私は白い包を持っていた。ペコンとおじぎをすると門を出た。嬉しかった。下の駅舎の前に立っていた。辺りはもう薄暗くなっていた。見下すと両側の商店にはポッポッと灯がついていた。あの家を出た時は明るかったのに。思わず体が震えた。首をブルッと震わせる。と長い急坂を一気に駆下りた。家の前に着くと犬の坐っていた辺りを眺めた。何も無かった。闇だけが拡がっていた。やっと階段を昇り高い敷居を跨いで家に入った。二階に昇った。「オヤ!! 今お帰りかい!!」「いゝ御身分だネ今迄どこをほつき歩いていたんだよ。家は客商売してるんだよ。夕時は手伝がいるって百も承知だろう、叔母さんを困らせたいんだろ、わざとやったんだね。いゝよ。畳に手をつけて謝りな。コラ!! 謝らないのか。どこ迄根性が腐っているんだか。何だよその目は。誰かさんにソックリだよ。よくマアこんな小さな子に躰けたもんだよ。あんたが身内だからって甘かすから、余程強く言って聞かせて根性叩き直して貰わないと。あ、もう、こんな時間。誰かさんと違ってコッチは貧乏閑無なんだから。」叔母さんは小さな尖った目を青光りさせてキッと睨んだ。乱暴に割烹着の紐を首に掛けるとバタ／＼と部屋を出て行った。その姿が見えなくなると「又叔母さんを怒らせたじゃないか。

駄目だよ。手伝いもしないで。全く、仕様のない奴だ。今迄どこに行っていたんだ。手に何か持っているな。何だ。」私は自分の手を見た。白い包を持っていた。「よそのお姉さん——犬さんに貰ったの。」「何だって訳の判らない事言っているんだ。家でさえお前に何もやらないの他に誰がお前に物をくれるもんか。とうせ——マア——いゝ。こっちに寄せ。」「何グズ／＼してるんだ。こっちに寄せ。」強い力でグイと引かれた。グニヤと乾いた音がした。手が軽くなった。何が起きたか判らなかつた。暫くぼんやりした。女の人が優しく微笑んだ。犬が優しい目で見上げていた。その瞬間、体が熱くなった。体の隅々から熱い大きな塊が大きくうねり乍ら次第に烈しい怒濤となって喉元目がけて突上げて来た。もう我慢が出来なかつた。遂に「こ」声が出ているのに驚いた。「こゝんちの子じゃないもん。」「叔母さんが籍入れるの厭だと言っててるもん。」「なんでそんな事知ってるんだ。」「うろたえた声でした。」「だって。知っているんだもん。」「こゝん家は、ホントのオウチじゃないもん。」「何時だってホントのお家へ帰れるんだもん。」「あっちじゃ皆一緒に御飯食べるもん。ちゃんと名前呼んでくれるもん。」「生れて初めて言葉を話した。一生分の言葉を使切ったと思っただけだ。」「中々空っぽになった。叔父さんはうなだれて黙って坐っていた。私は静かに包を拾うと空気の様に部屋を出た。後から追われている様で恐かつた。廊下にいた。前は物干台だった。角の物置台に坐った。静かに半紙を開いた。正ちゃん煎餅の顔が眉間から真二つに割目が入っていた。黒い目が左右に分かれていた。その目は、犬の目だった。涙が溢れた。

そっと包んで抱いた。暫くして目をあげるとすぐ前の上空に、金色に輝く月が浮んでいた。その傍に犬が坐っていた。思わず立上ってその方へ歩いた。「来ないで!!」「そこにいて!!」犬の声が出た。ふと足元を見ると物干台の縁に居た。「どんなに辛くても、悲しくても勇気を出して頑張るんだよ。今は、そこが君のいる場所だから。いつか、きっと、誰かが解ってくれるよ。今在る事は、君が大人になった時、君を支える大事な宝物になるよ。一緒に居て楽しかったね。本当は、もう君には会えないんだ。でも、君は、心に空を持っているから、何時でも会えるよ。遠くからだけど、何時も見えていてあげるよ。今日の事、決して忘れないよ。ありがとう。」声が終ると、犬の姿は消えていた。暗闇にはかすかな気配が感じられた。金色に輝く月はその儘そこに在った。

その夜は、何時もの夜の様に、只静かに過ぎて行こうとしていた。

エッセイ部門 「一 席」

尾張 恵子

「父の遺言」 P.69

鰻頭、ゆべし、おはぎ、そしてカツ丼。そんなものが好物だったお父さんは、最期が近づいたとき「スモモ」が食べたいと。あんなに甘いものが好きだったのに、今どきのスモモは「甘い」と怒った。会津地方の山深い父の生家へ向かう道のりの描写が鮮やかで、作品にダイナミズムを与えています。ラストはその道に思いを馳せ、裁ち落としのような終わり方が印象的でした。

堀江敏幸

大の甘いもの好きで、それが命を縮める原因になったかもしれないという父親の思い出。作者の前には目に見えない層が三つあります。放射能、コロナウィルス、時間。福島にある父親の生家を訪ねた子どもの頃の記憶を、手で触れられるほど具体的に再現できるのは、遺言が当人認定ではなく、家族の見なしによるというユーモアの気泡のおかげかもしれません。

エッセイ部門 「二 席」

中村 福子

「歌に思いを巡らせて」 P.78

ほとんど改行もなく、とつとつと心のままに低く歌いつづける、そんな秀作です。夫の父がカラオケで歌うのは軍歌、歌の合間に戦争の話も聴く。つぎつぎと病気をし、療養生活に追われた夫は、直立不動で一曲をきっちり歌う。義父と夫とご自分の三人で歌った歌、義父、夫、母と見送りたいま独りで歌う歌、それぞれの人生が重なり、胸に迫ってきました。

堀江敏幸

軍歌を歌うとき涙ぐんで戦争体験を語り出す「おじいさん」。心身ともに疲弊しながら前を向く夫とともに、歌を中断してその話に耳を傾ける作者が、狭いカラオケボックスで味わう共生感に胸を打たれます。直立不動で一曲一曲を丁寧に歌うという亡き夫の姿勢が、いま、これから生きようとすると作者の姿勢とみごとに合致しています。

松本 昂幸

「中村裕 ―ある俳人の想い出―」

P.87

鴻巣友季子

非常に読み心地の良い文章でした。俳人との出会いから、抵抗や衝突もふくめた付き合いと、ご自分の思考を深めていった軌跡。俳句を学ぶ喜びだけでなく、苦渋が書かれています。思慕だけでなく、すでに空気に溶けこんだような怒りを薄くまとった文章です。そこが良かった。

堀江敏幸

ひとりの俳人との出会いが、六十歳を過ぎた作者の日常に緊張感をもたらします。どこか張りつめた交流のなかで、俳句と対峙しているのか師と向きあっているのがわからなくなってくるさまが、淡々と描かれているところに惹かれました。しかし行間にまだ整理のつかないどろどろしたものが眠っているような気がします。それが本作の力でしょう。

金子 トシ子

「空になる」

P.97

鴻巣友季子

冒頭の施設のシーンからは予想もつかない世界へと。作者が幼少時に預けられた家の周りの情景や、夫婦の苛烈な口喧嘩などが、その場に居合わせるかのように迫ってきます。どこからともなく高貴な犬が現れる。それは初め、幻影のようで実物ですが、幼子の意識を通して一つのヴィジョンへと変容し、救いをもたらします。破調の予感を漲らせた文章は、完結した短編小説の読み心地がありました。

堀江敏幸

作者は九四歳。現時から小学校二年生の夏、叔父夫婦の家で偶然耳にした会話の、いまにつづく衝撃を、前後の色濃い描写が支えています。叔母の迫力ある台詞まわしは、随筆というより小説に近いものだと感じました。言葉が数珠つなぎで出てきて收拾がつかなくなりそんなところを、犬がきれいにまとってくれました。

令和3年度 第36回 世田谷文学賞

募集期間 令和三年九月一日～十四日
主 催 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館
後 援 世田谷区 世田谷区教育委員会

第36回 世田谷文学賞 受賞作品集

発行日 令和四年三月三十一日
編集 世田谷文学館
ブックデザイン 木村美穂（きむら工房）

発行 世田谷文学館
〒一五七-〇〇六二
東京都世田谷区南烏山一-〇-一〇
電話〇三-五三七四-九一一
<https://www.setabun.or.jp/>

